都留文科大學報

第124号
2014年
3月10日（月）

編集　都留文科大学広報委員会

〒402-8555　山梨県都留市田原 3-8-1　都留文科大学内
☎0554-43-4341　URL：http://www.tsuru.ac.jp/

加藤祐三学長退任

キャリア支援講演会

つるの宝かるた

文大生、雪かきボランティアで大活躍

学長退任にあたって ……2
加藤祐三 学長

特集　さよなら「文大」……6
初等教育学科　森　博俊 教授
英文学科　稲垣孝博 教授
社会学科　畑　潤 教授
比較文化学科　大森一輝 教授

おくることば ……10
初等教育科　柳　宏 教授
国文学科　寺門日出男 教授
英文学科　中地　幸 教授
社会学科　黒崎　剛 准教授
比較文化学科　山本芳美 准教授
大学院　阿毛久芳 教授

旅立つことば ……14
初等教育学科　伊藤美香
国文学科　早坂美由起
英文学科　佐々木良
社会学科　市川千尋／金塚　大
比較文化学科　Nils Olle Berg
文学専攻科　入倉こころ
大学院　国文学専攻　柳沼　希
社会学地域社会研究専攻　水野 祐樹
英語英米文学専攻　高野祐一
比較文化専攻　岩間祥也
臨床教育実践学専攻　平山雄大

卒業論文・研究論文・修士論文一覧 ……22
初等教育学科・国文学科・英文学科
社会学科（現代社会専攻／環境・コミュニティ創造専攻）
比較文化学科・文学専攻科・大学院文学研究科

講演会だより ……36
国語国文学会講演会
英文学科・英文学会共催講演会
地域社会学会講演会
司書・司書教諭コース特別講演会
ジェンダー研究プログラム講演会

文大だより ……41
地域で活躍する学生ボランティア
奨学金について
卒業演奏会を終えて
卒業制作展を終えて
キャリア支援講演会
文大名画座「100,000年後の安全」
地域貢献活動「つるの宝かるた」に参加して
フィールド・ミュージアム通信
編集後記
本　ぶんだい堂

加藤祐三学長退任

学長退任にあたって

学長　加藤祐三

今年度末をもって学長を退任します。教職員のみなさん、学生団体の代表、留学生諸君、同窓会の方々と一緒に仕事ができ、実り豊かな時間を送ることができました。心より感謝申し上げます。

鳥原正敏広報委員長の求めに応じて、大学運営の成果や思い出、次期学長に託す事、未来へ向けての提言等を、思いつくままに綴ることにします。

公立大学法人

本学が公立大学法人となって５年目が終わろうとしています。経営の責任を持つ理事長と教育研究の責任を持つ学長（＝副理事長）が別人である「分離型」を本学は採用しました。着任したころは法人への移行をめぐる意見対立がまだ残っており、この問題にまず取り組みました。これについては、紙幅の都合上、本学ホームページにある学長ブログ「法人化４年の成果」(2013年３月４日）等に譲ります。なお学長ブログは本学ホームページから自由に入ることができます。以下の行文でも学長ブログ参照という形をとることがあります。

法人へ移行後は、理事長と学長（副理事長）の両名に事務局長と両副学長の計５名で常任理事会を構成、有能な事務局（重原達也・小林正人課長、藤本信夫・谷内治彦課長補佐、鬢櫛美咲主査等）の支援のもとに、予算決算をはじめとする重要事項を決めています。昨年、西室陽一理事長が退任、大谷哲夫理事長が就任されました。

教員人事等の教育研究に関する重要事項は教育研究審議会で決めます。教育研究審議会は学長が議長で、今年度の委員（敬称略）は、２副学長（高田理孝、福田誠治)、事務局長椎廣行、非常勤理事浅川博、３学長補佐（大平栄子、清水雅彦、田中昌弥)、研究科委員長阿毛久芳、５学科長（寺川宏之、牛山恵、竹島達也、前半が横田力、後半が前田昭彦、伊香俊哉)、３センター長（杉本光司、新保祐司、鶴田清司)、２課長（重原達也、小林正人）の計19名です。

教授会（議長は高田理孝副学長）は教務、学生等に関する重要事項を、大学院研究科委員会（議長は阿毛久芳委員長）は大学院担当資格審査や人事等を審議します。いずれも事務局職員の支援が欠かせません。こうした役割分担をはっきりさせ、多数が納得する大学運営を効率的に進められるようになりました。

佐野夢加さんアジア大会壮行会で激励（平成22年度）

４つのプロジェクト

教育研究に関することで忘れがたいのが、３年前の2011(平成23）年春に立ち上げた「４つのプロジェクト」です。（A）入試戦略、（B）教職課程・教職大学院、（C）カリキュラム改定、（D）センター機能の強化再編です。（A）と（C）の委員長を高田理孝副学長に、（B）の委員長を福田誠治副学長にお願いしました（学長ブロ

加藤祐三学長退任

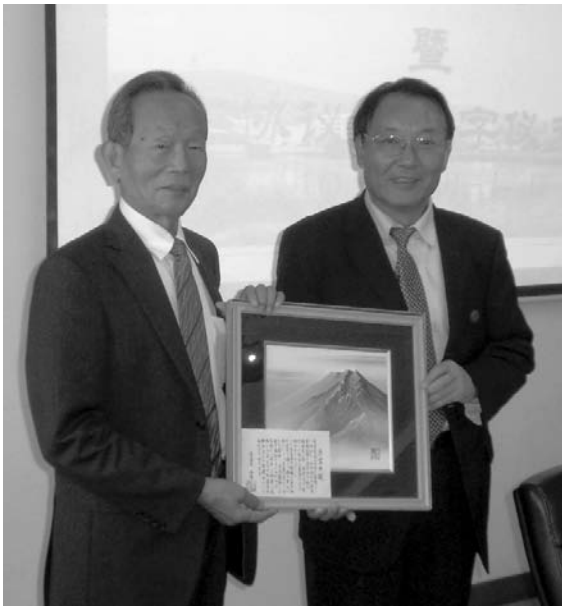
グ「４つのプロジェクト」2011年７月９日)。

（A）と（B）は絶えず新しい課題が生じるため常設のプロジェクトとし、（C）は２年にわたる検討のすえに今年度から実施段階に入りました。（D）は可能なものから実施、2012（平成24）年度にキャリアサポート室を格上げし、専門員を増員、内装も一新、キャリア支援センターとしました（鶴田清司センター長)。その翌年度、国際交流センター（新保祐司センター長）が発足、従来の国際交流室と外国語教育研究センターに新しく日本語教育室を加え、機能強化を図りました。

看護学部問題と本学の将来像

2011年の秋頃から都留市の設置した有識者会議で看護師養成機関の創設が議論されました（本学に併設することも想定)。教育研究組織の改編という大学にとって最重要課題が、教育研究の責任者である学長に相談なく進められたため、検討の仕様もなく、ただ有識者会議の成り行きを見守るだけでした。

2012(平成24）年３月に示された有識者会議の答申を踏まえ、看護学部併設を含めて本学の将来像を描くため、常任理事会で検討を進めました。その際、全国に約780ある四年制大学のなかで、本学がどのような位置にあるか外部の評価を得るべく、河合塾と三菱総合研究所の外部機関（シンクタンク）に診断を依頼、提案を得ました。いまも基礎資料として活用しています。



湖南師範大学との交換留学更新協定締結（平成23年度）

「今後の方向性」（2012年７月31日）

その結果、常任理事会として「公立大学法人都留文科大学の今後の方向性について（報告)」（2012年７月31日）をまとめ、西室理事長名で小林義光市長へ提出しました。「今後の方向性」の検討は、次の４点を軸に行うとしています。

（１）　教員養成系大学としてのブランドの強化
（２）　地域を創る人材の養成の強化
（３）　グローバル化を支えるスペシャリストの養成の強化
（４）　リベラルアーツ教育の強化

これをさらに具体化するため、同年12月、西室理事長により「都留文科大学の今後の在り方検討委員会」と「都留文科大学施設整備基本構想検討委員会」の２つの諮問委員会が設置され、2013(平成25）年３月に答申が出されました。４月からは大谷理事長の下、常任理事会を中心に検討を重ねています。

「都留文科大学のさらなる飛躍に向けて（案)」(2013年８月20日）とその進捗状況

2013(平成25）年７月、地方交付税交付金の補正係数の見直しにより、人文科学系学部への交付金がほぼ倍増となることが判明しました。この仕組みはいささか複雑ですが、背景となる公立大学協会の情報公開等の努力と経緯をふくめ、その概略は学長ブログ「人文科学系学部の公立大学」(2013年８月22日）に書きました。苦節30年の末の、千載一遇の好機到来です。

改革に向けた財政基盤が強化される余地が生じたことから、すぐに着手すべき基本方針を検討し、８月20日の常任理事会で「都留文科大学のさらなる飛躍に向けて（案)」を決定し、８つの基本方針を掲げました。すなわち、①学部・学科、カリキュラム等の見直し、② 学生

加藤祐三学長退任

佐野夢加さんロンドンオリンピック報告（平成24年度）

支援、③ 施設整備、④ 教員配置、⑤ 国際交流、⑥大学COC事業、⑦社会人の学び直し、⑧事務組織の見直しです。交付金に関する最終的な詰めは、堀内富久市長と大谷理事長の間で行われます。

その間も、８つの基本方針のうち３項目を先行して進め、結論を得て実施に踏み切ったのが「② 学生支援」です。2013（平成25）年12月９日、「奨学金（給付型）・奨励金の創設」を決定し、平成26年度から実施するむねをホームページ等に発表するとともに、全国の高等学校に通知しました。なお学長ブログ「遊学のすすめ」（2013年12月12日）もご覧ください。

「③施設整備」については、2013（平成25）年３月答申の「基本構想」を基本計画へ具体化するため、本年１月に施設整備委員会が発足しました。

「⑥大学COC事業」は、上掲「地域を創る人材の養成」を実施するための事業であり、「大学が地域の中核になる」COC本来の狙いもあり、過去10年間の地域交流研究センター（杉本光司センター長）事業の発展形態でもあります。

大学教員の４つの仕事

ここまで大学改革の経緯を述べてきました。それを支えているのが教職員の智恵と努力です。そのうち大学教員の４つの仕事である教育（知の継承）、研究（知の創造）、社会貢献（知の普及）、学務（大学運営の心臓）について述べます。

大学の教育は担当教員が自分の責任において行いますが、自分勝手に行うのではありません。学部・学科の目的に応じ、学生がどう学ぶか（３つのポリシー）を定め、その一部の科目を担当し、シラバスを作成して事前に学生に示します。ここでプロジェクトＣ（カリキュラム改定）の成果が実りました。

研究も個々の教員の責任において行います。研究成果は教育に活かされると同時に、研究の着想・方法・展開等を学生が身につける鏡ともなり、必修の卒業論文や大学院の修士論文の指導の場でも活かされます。

地域貢献は、文字通り地域や社会に貢献する諸活動です。とくに本学では各種の講演会、子ども英語教室、「文大名画座」等に加え、南都留の小中高校やPTA等と連携した「南都留地域教育フォーラム」（毎年開催、今年で16回目）にも大きく貢献しています。

学務は、本学では想像以上に大きな比重を占めています。教育研究審議会、教授会、大学院研究科委員会、学科会議のほか各種委員会があり、とくに教務（中井均委員長）、入試（竹下勝雄委員長）、学生（高田研委員長）、広報（鳥原正敏委員長）、人権（野畑眞理子委員長）の５委員会は作業が質量ともに多く重要です。入試にはミスが許されず、その準備のための全体会議では「入試なくして学生なし、学生なくして大学なし」と、気持ちを引き締めて当たるよう、お願いしています。

次期学長に託す事

次期学長に福田誠治副学長が選任されました。顔ぶれこそ変わるものの、これまで一緒に築き上げてきた成果と路線の延長上に、新たな特色ある展開がなされるものと期待しています。

当面の大きな課題は、交付税交付金の増額に伴い、「学生支援」につづく第二弾の「施設整備」をいかに進めるかです。これからも多くの引継ぎ事項が出てくるでしょう。事務組織は、他大学とは比較にならない少数精鋭で、精一杯の努力をしていますが、新規事業には補強が不

加藤祐三学長退任

可欠です。

在任中に私が心してきたことは、民主的組織のトップが払うべき「内容と形式」両面への配慮です。内容が優れていても、手順やタイミング等の形式が整っていなければ実現は難しい。その逆も真です。よろしくお願いします。

創立60周年記念事業

2015(平成27）年、都留文科大学は短大から数えて創立60周年を迎えます。その記念事業推進を昨年秋に常任理事会で決定し、同窓会と手を携え、創立60周年記念誌編集部会を立ち上げました。

これまで『都留文科大学記念誌』(平成元年）と『都留文科大学創立五十年記念誌』(平成16年）の２冊を刊行しており、創立60周年記念誌には、本学の卒業生がどの分野で、どのように活躍しているかをインタビュー形式で記録し、段階的に刊行する案を検討中です。

本学の未来へ向けての夢

本学の未来へ向けていま何をなすべきか。世界が注目する都留文科大学に発展させるため、「日本研究所」を創設し、世界中の日本研究者を集め、本学の新たなブランドとする案があります。前掲「今後の方向性」の「(３）グローバル化を支えるスペシャリストの養成」の一環であり、その先行形態でもあります。

日本研究所の特色を要約すれば、外国の大学で日本研究関連の学位をとったポスドク等の（若手）研究者を本学の客員講師、客員准教授等として採用、本学での研究（個人研究＋共同研究）と、そのスキルアップを支援すると同時に、週２～３コマの授業を担当してもらう。

突飛な構想に映るかもしれませんが、「案ずるより産むがやすし」で、良いリーダーを得れば、高い成算があると私は考えています。

三訓

書き残した多くの事項があります。東日本大震災と津波で亡くなった学生や同窓生のこと、それを機に書き始めた学長ブログ、学生ボランティアの震災復旧支援活動、湖南師範大学との協定更新、学生団体による鶴鷹祭と桂川祭、卒業生の佐野夢加さんのロンドンオリンピック女子400メートルリレーの出場、英文学科出身のジャーナリスト山本美香さんの内戦シリアでの無念の死、合唱団の５回にわたる全国優勝（金賞)、医系総合大学・昭和大学との連携協定調印、富士山の世界遺産登録等々。その時々に学長ブログを書きましたので、ご参照ください。

入学式や卒業式の折に必ず触れる三訓は、受験生むけの『大学案内』や学生団体の冊子類の挨拶、また学長ブログ等にも繰り返し出しています。学長退任にあたり、本学のさらなる発展を祈念しつつ、この三訓を置き土産とします。

アシコシ　ツカエ（足腰使え）
ツキイチ　コテン（月一古典）
セカイヲミスエ　モチバデウゴカム（世界を見すえ持ち場で動かむ）

（2014年１月24日稿）

鶴鷹祭優勝旗授与（平成25年度）

さよなら文大　退職教員からの言葉

小学校の教師養成に携わって

初等教育学科教授　森　博俊

養護学校義務制がはじまって間もない頃、私は「小学校の教師養成のなかで障碍児教育を担当するはじめての専任」としてこの大学にきました。以来30数年間、小学校教師を志す学生と障碍児の教育について考え深めあってきたことになります。それは障碍があっても「一人の子ども」として関わるという観点を強く意識することにもなり、少なくない卒業生のこの道での活躍にふれるたびに、喜びと手応えとを感じてきました。

とはいえインクルーシブな教育や学校のあり方が現実的な課題となった”いま”、この大学の教師養成がそれにふさわしい内実をもっているのかと問われると否定的にならざるを得ません。私の力量不足もありますが、卒業生のどのくらいが障碍や発達の問題を直視した教師として主体的に課題を受けとめ、子どもの抱える「弱さ」や「ちがい」を位置づけた教育実践に挑戦できるのか、確信できないというのが正直なところです。

学校現場がまだ十分に対応できていないことを卒業生に求めるのは無理な話です。しかし、問題の所在やこれを捉えるおおよその枠組み、取り組む構えについて、自らの実践のなかで思考し省察しようとするセンスはもってほしいと思います。もっともそれは、たんに特別支援学校の免許を取らせれば足りるというものではないことも強調しておきます。

学生たちは漠然とかもしれませんが、学びたい「何か」を求めて入学してきます。やや薄っぺらに見えても、その思いを問題意識に練り直し、新しい学習の可能性に育てていくのが大学教育の仕事です。この過程では「研究」、とまではいかなくても「もの」を考える態度や仕方に触れ、「知」のもつ力を味わう経験が重要だと考えています。「学習者」と「研究者」との出会いの場に生成される意味と活力が不可欠なのではないでしょうか。

ゼミ恒例の春合宿「卒論、はじめの一歩」（宿のオーナー親子と）

ところが、教師志望の学生は往々にして資格のための単位取得が先に立ち、何を軸に学習＝研究するのかを等閑視しがちです。実はこれは「今の大学」も似ていて、免許種を増やすための制度的要件や国の政策動向については鳩首凝議するのですが、肝心の学生の現実やその可能性、現代の子どもと教育をめぐる問題への主体的洞察が顧みられないのです。このために教師養成の基礎をなす研究領域の理解がなかなかすすまないように見えます。

多くの暗黙知を含むと言われる教師の養成が、いかなる研究＝学習領域を軸に構成されるのかを明示するのは簡単ではありません。だからこそ逆に、教師教育を直接担う専門家集団の多様な努力と見識が活かされるように、「現場」から自由で活発な議論をおこすことが必要なのです。企業的経営からみると「無駄」にみえるかもしれませんが、そのような「手間」が大学教育の活力を支え、結局学生を鍛え育てる近道になるのだと思います。

大学教育の「成果」は、研究者（＝先輩学習者）との交流に支えられた学生たちの学習の日常にあることを忘れないようにしたいものです。都留で小学校の教師養成に携わり、教えられたことです。人間探求の大学「文大」で小学校の教師を育てる意味を具体化すべく深めてほしいと思います。

みなさんのご健闘を念じつつ、「さよなら」。

さよなら文大　退職教員からの言葉

最も印象深かったこと

英文学科教授　稲垣孝博

在任中最も印象深かったことは何ですかと問われました。こたえはどうしても昔々のお話になってしまいます。

私が都留に赴任したのは1977年です。４月１日に辞令をもらった直後、たしか４月７日だったと思いますが、臨時教授会をやるから出校すべしとの連絡を受けました。学長に就任してわずか１年の和歌森太郎先生が亡くなり、葬儀の段取りと学長代理を決める会でした。学長の大学葬から始まった勤務でしたが、当時の英文科の先生方にやさしく受け入れていただき、好印象の出発でした。

私の前任者は奥津彦重先生で、戦前からゲーテの研究者として高名な方でした。東北大学、日本大学をそれぞれ定年退職して都留に赴任していました。当時80歳を超えるご高齢でした。ずいぶん小物になったねと冷やかされましたが、私は奥津先生の後任であることが誇りでした。

奥津先生に限らず、あのころはご高齢の先生方が定年制のしかれたことによって次々と辞められ、30歳前後の若い教員が毎年数人ずつ採用されていました。教授会もこぢんまりとしていて、ときに激しい議論もありましたが、全体としては家族的雰囲気が強かったように思います。教員採用も好調で、皆が同じ方向で努力できたのがよかったのでしょう。今にして思えば、1980年代くらいが都留文科大学の黄金期だったのかもしれません。

1991年のいわゆる大学設置基準の大綱化は、私にとって大きな転機になりました。奥津先生の後任の立場を死守する道もあったのかもしれませんが、結果として研究分野を修正して比較文学の世界に入っていかざるを得ませんでした。1997年からは英文科のゼミも担当し、毎年10人前後の学生の卒論制作に寄り添ってきました。自分の専門を押し付けるわけにはいかないので、学生の興味を主体として補助的な立場に徹しました。ときには自信喪失の学生が卒論を書くうちにみるみる成長していくダイナミズムにも出会えました。それは私の幸福な体験です。

2013年９月ゼミの卒業生たちと会食

この10年ほどは、外国語教育研究センターの創設と育成に尽力してきました。本学の共通外国語教育は大綱化以来必修科目が半減され、ほとんどの授業が非常勤の先生任せで、学習・教育環境ともにきわめて貧弱なものでした。払った犠牲の大きさを考えればそんなにむきになることもなかったのですが、当時変な「義侠心」を感じて、学生の学習環境を整え非常勤の先生方をサポートする外国語センターを作ろうと気負って努力しました。

退職するに当たって都留での30数年を振り返ると、教育、研究、大学運営への寄与のどの分野においても思い残すことばかりです。しかし印象を一つだけ挙げろと言われると、赴任してすぐにワンゲルの学生たちと一緒に登った三つ峠の岩場の風景が思い出されます。今も富士山の見える山によく登りますが、あの頃の思い出と一体化した富士山ほど美しい景色はありません。しかし時の推移は絶対です。今後は後ろ向きの感傷を捨てて、最期の人生、健康が許してくれるかぎり何か新しいことにチャレンジしようかと考えています。

さよなら文大　退職教員からの言葉

人間研究の共同の機関＝都留文科大学に在職して

社会学科教授　畑　潤

私は都留文科大学には、非常勤講師として１年、専任として25年間勤めました。専任となりましたのは、社会学科創設３年目の春で、今では私が社会学科創設時の最後の教員ということになりました。社会学科は、その創設時から都留文としては新しい試みを次々と展開したのですが、新入生オリエンテーションを河口湖畔で、教員全員が参加して合宿するというのもその一つで、そのときの記念写真を見ますと、教員もみな「青年」に見えます。

さて定年退職のときがきたということで、ふと研究室に配置してあります卒業論文を見つめ、その数を数えてみようという気になりました。修士論文を含め274冊ありました。それらの卒論・修論は、執筆学生とその長い執筆過程に付き添ってきた私自身との共同の記念碑だなという感想が湧いてきます。どの論文にも、学生それぞれの苦闘と、不十分とはいえ私の格闘とが記されています。これらは、私自身の内的支柱のシンボルであったように思います。

研究面では、在任中に古代ギリシアの思想家プラトーンに出会えたことが最大の成果です。私の学生時代、大学院生時代は、いわゆる社会科学が圧倒的な影響力をもっていましたので、プラトーンに心が向く機会はありませんでした。けれども、先学の勝田守一氏の論文「パイデイア」（古代ギリシア語で教育・教養という意味で、勝田はW.イェーガーの大著『パイデイア』から学ぼうとした）が、理解しきれない思いとともにずっと心にあったわけで、都留文着任後に具体的にプラトーンの諸「対話篇」（『ソークラテースの弁明』を筆頭に古典の山脈として現代へと継承されている）を開き、私の古代ギリシア文芸・思想への探究心に火がつきました。そのことにより私の研究の視界は一気に開けていきました。

古代ギリシアにおける「人間性」（human nature人間の自然性＝本性）の意識化は、その発育・形成に関わる「教育」（近現代的な意味での「教育」の源）の成立と一体的なもので、同時に教養・文化（culture）を尊敬する気風とも重なるわけです。私の研究は、社会教育・生涯学習の哲学というべきもので、その本格的な展開は退職後ということになりますが、しっかりとした見通しをもてたことは、しみじみとうれしいことです。

ところで振り返って心深く思うことは、都留文（同僚たち、職員の方々、学生たち、市民の方々）が私を育ててくれたということです。着任後一年もしないうちに、私は都留文が大好きになりました。そして日本でもっとも大学らしい大学だと判断するようになりました。民衆の生活と文化を擁護しようとする学術・文化を基調に、自由と自治を原理にして、学科を超えて皆がひたむきに力を尽くしあっていたからです。この小さな公立大学のことを、私は大海を渡ろうとする小船のように思うことがあるのですが、荒波が過ぎてみれば沈むことなく、乗組員が忙しく立ち働きながら、自らの羅針盤を保持して健気に巧みに前進し続けているというイメージです。そのような緊密な共同の営みのなかで、私はいくつもの忘れ難い人間的出会いを経験することができました。

改めて思うのですが、そのような自律的な大学が突然に生まれるわけはありません。私たちの大学は、厳しい試練を歴史的にもっております。都留文科大学を大切に思うこととその歴史を知ることとは相関するものと思います。どうぞ自らの存在への関心を深めながら、ほんとうによい大学を目指していってください。

さよなら文大　退職教員からの言葉

20年かけて「卒業」

比較文化学科教授　大森一輝

都留に着任したのは、1994年の４月で、まだ30歳でした。大学院を出たばかりで、非常勤で教えた経験もゼロ、とても「先生」と呼んでもらえるような状態ではありませんでした（実際、先生には見えなかったようで、「この本は学生には貸せない」とか「勝手に印刷機を使っちゃダメだよ」とか言われました）。講義の前日には、毎週ほとんど徹夜で準備をしていました。それでも、同僚の先生方はあたたかく見守ってくださり、学生たちは（年齢が近かったからだとは思いますが）慕ってくれました。最初の数年は、お給料をいただきながら「教育実習」をさせてもらっていたようなものです。

各種委員会、学科会議、教授会も、最初はチンプンカンプンでした。大学教員であるとはどういうことで、研究・教育以外に、どんなことをどのようにしなければならないのかを、本当に一つずつ、毎日覚えていきました。大したことはできませんでしたが、次第に、自分も大学運営に多少なりとも貢献しているという気持ちを持つようになりました。

そういう意味では、都留文科大学は、私にとっても「学び舎」でした。小さな大学だからこそ、膝を突き合わせて学生と一緒に勉強し、学内行政でも早くからいろいろな経験をさせていただきました。その中で、（直接そうは言われなくても）先輩方に身をもって示され、私も知らず知らずのうちに身につけた、いちばん大切なものは、「大学はみんなで作り上げていく」という感覚です。

それが失われつつあることを、大変悲しく残念に思っています。今回、別の大学に移る決断をしたのは、故郷への想いや家族の事情など、様々な要因があるのですが、「母校」である都留文科大学で教わったことを存分に生かせる場で仕事がしたかったからでもあります。

20年を経て、どれだけ立派な教員になれたかは、正直、自信がありません。研究者としても、まだまだ未熟です。だからこそ、この「卒業」を契機に、再出発したいと思っています。大学とは、学問とは、何なのかを、根源的に問い直しながら。

新しい職場が理想郷などではないことは、もちろん、承知しています。しかし、私学には、国公立とは違った、相対的な自律性があるとも聞いています。「独立」行政法人・都留文科大学が、世間の安易な風潮や短期的な利害に流されるのではなく、独自の発展を遂げることを心から祈っています。

長い間お世話になりました。私は、学長選における学生投票制度を独法化直前まで何気なく残していた（2000年代まであったのは、全国でも、おそらく本学だけだったはずです）、そんな都留文科大学が大好きでした。

ゼミの１期生と合宿（1995年夏　小淵沢）

おくることば

卒業生へ

初等教育学科教授
柳　宏

初等教育学科の卒業生の皆さん。卒業おめでとうございます。

都留に来た日のことを覚えていますか？　期待に胸を膨らませ、同時に不安を沢山抱えながら入学式に出たことを。あの日から４年の月日が経ちました。あっという間だったかな？長かったかな？充実した大学生活を送ることができましたか？やり残したことはありませんか？

多くの皆さんは小学校教員になることを目指して本学にやってきました。卒業後、直ぐに教壇に立つ人は、新米先生とはいえベテラン教員と同じように学級経営をしなければなりません。困難が沢山待ち受けています。周囲の方々の指導をしっかり受けながら乗り越えて下さい。頑張れ！

今年も採用試験に挑戦する人は準備をしっかり整えリベンジして下さい。仮に今年も上手くいかなくても、諦めずに挑戦し続けて下さい。いつかきっと良いことがありますから。頑張れ！

ところで私は、本学体育教員として皆さんに不安があります。それは運動実技能力が不足していることです。指導要領に定められている学習内容ができない者が沢山います。体育科の授業は「できる・できない」が誰でも、その場で、瞬時に、判断できてしまいます。子ども達でも判断できてしまうということです。このような意味で体育科は他教科に比べ、とても衝撃的でエキサイティングな教科です。運動学習においては良いイメージを持つことが重要です。「先生、見本見せて！」と求められても示範を示すことができないということは、学習効果に大きく影響します。そればかりか、子どもからの信頼を失いかねません。さらには実技能力が劣る先生はどうしても体育科の授業がおろそかになり、「体育嫌い」の子どもを作ってしまう傾向があります。一方、実技能力が劣っていても子どもの実技能力を十分に伸ばすことができる教師は沢山います。「できないこと」を「できる」ようにする。「できていること」をさらにダイナミックに、美しく、大きく「できる」ようにする。

子ども達に運動の本当の楽しさを教えてあげて下さい。　卒業おめでとう！

ゼミ合宿in菅平高原

真の教養人に

国文学科教授
寺門日出男

まずは学年担任として、ご卒業を心からお祝い申し上げます。

担任とはいっても、大半の方々にとっては、オリエンテーションで顔を合わせる程度で、あまり親しみはないでしょう。むしろ、授業で叱責され、顔を見るのも嫌という方もいるかもしれません。でも、この学報での贈る言葉が、担任として全員に接する、おそらく最後の機会。暫時おつきあい下さい。

社会に出ると、他人に注意される、叱られるということが、ほとんどなくなります。会社でさえ、昨今では部下を叱る上司はわずか一割だそうです。立ち位置を修正してくれる存在がいない状態が続くと、正しいか否かを冷静に判断することは、なかなかに困難です。

人間、自分の落ち度・欠点を率直に認めることは、容易には出来ないものです。罪を犯した場合ですら、自分の非を直視しようとはせず、ひたすら弁護に努めてしまうようです。理屈はいくらでもたてることができます。皆やっているのにどうして私だけ、組織を守るため止むを得なかった、社会が悪い、そもそも何でこんなルールが必要なんだ等々。

でも、いくら理屈を並べたてても、正しいことの証しにはな

おくることば

りません。現実は勧善懲悪の時代劇のように、はっきり善悪が二分されるものではありません。夫婦関係や会社におけるもめごとから国際紛争に至るまで、ほとんどの場合、双方が自分の正当性を主張しあっていて、それぞれにそれなりの理があるのだと思います。でも、互いが主張をしても問題が一向に解決しないこともまた、自明の理です。

孔子の高弟・曾子は、自分が正しかったか否かを日に何度も省みたそうです（吾日に吾が身を三省す）。そんなに頻繁にする必要はないと思いますが、自己を客観視することは、やはり大事なことで、それができる人こそ真の教養人だと思います。

新規採用者の三割が三年以内に退職し、夫婦の三組に一組が離婚で終わるという現代の風潮は、自己を正当化することばかりに巧みな知識人が増えたことと関係があるように思います。全てを耐える必要も毛頭ありませんが、善く考え、善く行動する、教養人として、社会に貢献してくれることを願っております。

祝辞にかえて
―イサム・ノグチの生き方に学ぶ

英文学科教授
中地　幸

20世紀を代表する彫刻家の一人であるイサム・ノグチ（1904～1988）は、あるインタビューにおいて次のように語っています。「芸術家の生活とは本当に孤独なものです。もし孤独でなかったら、僕も社交的で感じのいい人間であったかもしれませんが、駆り立てられることはなかったでしょう。芸術に駆り立てられるのは、結局のところ、絶望からなのですよ。人間とはもともとは怠惰なもので、駆り立てられなければ、何もしませんからね。」

イサム・ノグチは、若くして才能を認められ、芸術家としては大変幸運なスタートを切った人いえます。しかしその人生には、私たちが幸福の定義として考えるような安らぎといえるものがどれほどあったのだろうかと私は思います。日本人の父野口米次郎とアメリカ人の母レオニー・ギルモアが融合を果たせなかったように、彼の中には常に相反する力が拮抗していました。二つの国、二つの言葉、二つの文化の狭間において、イサムは常に引き裂かれ続けました。

母子家庭に育ったイサムは経済的にも恵まれてはいませんでした。彼は母を捨てた父を恨んでいました。レオニーに結婚の約束をしながら、同時に別のアメリカ人女性に求婚し、挙げ句の果てには日本人女性と結婚した野口米次郎は、その行いからして息子に恨まれでも仕方ないかもしれません。野口もそれなりに責任をとろうとはしていました。しかし野口は、レオニーとイサムに日本に来るよう懇願する手紙の中でも、決してレオニーに彼女を愛しているとは言いませんでした。レオニーは愛のない結婚をよしとしなかったのです。

母レオニー・ギルモアの妥協ない人生は、やはりそれなりの苦労を伴ったものだったと言わざるを得ないでしょう。しかし、その姿勢はイサムに引き継がれたものであったように思われます。二人とも激しい情熱を秘めた孤独な人間でした。二人とも困窮の果てから、新しい何かを切り拓いていく人間でした。誰もが彼らのような生き方や選択ができるとは思いません。でも、楽しく、賢く生きるだけが人生ではないということを教えられる気がします。

卒業生の皆さんの夢は何でしょう。どうか大きな夢を持って下さい。そしてその夢に向かって、駆り立てられるように疾走してください。怠惰な幸福に埋もれるのではなく、何かに情熱を傾け、ひたむきに生きてください。ご卒業おめでとう。皆さんのこれからの人生が輝かしいものであることを心からお祈り申し上げます。

シアトルのアジア美術館前庭にあるイサム・ノグチの彫刻「黒い太陽」（1969年）

おくることば

ひとつひとつ

社会学科准教授
黒崎　剛

卒業生の皆さん、おめでとう。前途が決まっていないので、おめでたくないという人もいるかもしれないが、人生において、学校を卒業するというのは、多い場合でも小、中、高、大とだいたい４回しかない。新たに学校に入りなおさない限り、大学卒業はその最後を飾るものであるから、いわば卒業からの卒業である。卒業おめでとうと言ってもらえる最後の機会であるから、素直に祝福を受け取ろう。

とはいえ、君たちの姿はあまりに頼りなく、これで残酷な現世で生きていけるのかと、我々はハラハラする。だが、そんな我々も何十年か前は、たよりない卒業生だった。私などは、卒業後、一年間フリーター生活を送り、その後は大学院にいったものの、あんまり威張れる経歴を持っていない。そのために本学でも給与査定が低く、いまだにアルバイト生活から抜け出せない。今も毎年綱渡りの連続のような生活だが、だからこそ得たものは大きい。わずかばかりの恵まれた仕事をひとつひとつこなす。ひとつのことを成し遂げるたびに、ひとつのことを身に着け、ひとつの自信を獲得していく生活である。安定した職業についている人たちでは決して得られないようなタフさ、残酷な世の中を現実的に生きる力を与えられ、そして批判的に見る目を鍛えられたのは確かである。明日はどうなるか分からないという状況の中で、目の前のひとつひとつのことを仕上げていくということは、小さな卒業を積み重ねていくようなものだ。ひとつひとつの「業」が自分の自信に転化する。不安定な生活には、そういう楽しみもあるのだということを忘れないでほしい。

「今から社会人になるといっても、自信が持てない」と不安を漏らすのも当然だが、未知の世界に万全の自信をもって臨む者はいない。みんな少なからずおびえている。おびえを取り去るには、特効薬はない。下手な考えにとらわれるのをやめて、目の前のことをひとつひとつこなして、小さな自信を積み重ねていくしかない。そして、報われなくても、それはそれで笑って受け入れ、絶対にくさらないこと。自らくさってしまったら終り。このことだけは覚えておいてほしい。

卒業生の皆さんへ

比較文化学科准教授
山本芳美

まずは、誠にご卒業おめでとうございます。

さて、先日、都内の名画座で『ブリキの太鼓』という映画を観ました。この映画は、戦後ドイツ文学の最高傑作ともいわれる1959年に発表された作家ポール・ギュンターによる小説を下敷きにしています。1979年にカンヌ国際映画祭の最高賞にあたるパルム・ドール賞を受賞しています。映画が描く時代は、大人の世界に幻滅したオスカル少年が、わずか３歳で成長を自ら止め、終戦を迎えた21歳で再び成長しようとするところまでを描きます。主な舞台は、ポーランドの自由市ダンチッヒ（現在のグダニスク）で、オスカルの祖母がオスカルの母を身ごもることになった1898年の出来事から映画が始まります。当時12歳のダーヴィット・ベネントが、オスカル少年を常に顔をひきつらせながら演じています。

勘のよい人はわかると思いますが、この作品の重要な主題は、ナチスドイツ占領下のポーランドと欧州の関係です。民族問題、帰属、差別、複雑な家族など、現代社会を読み解くうえで、ますます重要で示唆的な内容が描かれています。もう一つ、現代の若者に通じる主題は「（汚い）大人になりたくない」と折々に

おくることば

抵抗するオスカルの叫びです。この叫びは、家々の窓ガラスを破壊するほど強力です。いま、卒業生の皆さんは卒業後に迎える新生活に対する不安にかられているかもしれません。ほぼ16年以上、学校で過ごしてきた人が大半なので無理もありませんが、単位をひととおり取り終えた４年生の皆さんには、「とっとと出て行ってほしい」ものです。大学は居心地よい場所ですが、いつまでもしがみつくのは、大人になるのを拒否するオスカルが、どこか無理をしているように見える姿に重なってきます。

この映画を知ったのは、大学時代の友人が、「面白いよ」と勧めてくれたのがきっかけでした。おそらく、学生時代に観ていたら、映画の歴史的背景や奇妙な人物像に重ねられた寓意、民族の対立、もつれつつも深まる２人の男と１人の女の愛情、それを許しあいながら生きる人々の姿などは感じとれなかったでしょう。『ブリキの太鼓』は私にとっては、20年越しの宿題のような映画でした。大学はさまざまな人々と出来事に出会う場ですが、友人たちや教員、周囲の人々の何気ない会話の端々に、人生のヒントが隠されているかもしれません。今は大学生活にひとまず別れを告げ、ヒントさがしをしてみてください。これは、モラトリアム人間として25年間以上も学生を続けた反面教師からの反省と自戒をこめた「卒業生に送る言葉」です。

大学院修了生におくる言葉

国文学科教授
阿毛久芳

大学院修了生の皆さん、修了、おめでとうございます。皆さんは大学卒業後、さらに勉学の時間を持ちました。そして修士論文を書き上げました。おそらく今、卒業とは異なった感慨にいるのではないでしょうか。卒論では書き切れなかった問題を研究すること、足らなかったのはどこか、進めるには何が必要か等を、大学院の授業や外に出かけて得た刺激も合わせてつかみ取り、形にするむずかしさを改めて感じつつ、なんとか修士論文を完成させた……というようなことではないかと想像します。

卒業論文での自分の道筋が、修士論文を書き上げた場所からはよく見渡せるのではないでしょうか。むろん、先は見えませんが卒論の先を歩んだということが、修士論文の先を進む力となることを疑いません。

これから社会の場で大学院修士課程の修了生として評価されていくわけですが、情報に振り回されるのではなく、調べることにおいて吟味し、複数の情報から分析し、問題点を明らかにし、考えを明確に示す形で提示するということは論文作成で行った事であり、自分の持ち場で取り組むことで、さらにその能力を伸ばしてほしいと思っています。

中原中也は「Me Voilà」（私はここにいる）という評論で「げにわれら死ぬ時に心の杖となるものがあるなら、ありし日がわれらの何かを慄はすかの何か！　――生を愛したといふことではないか？／小学の放課の鐘の、あの黄ばんだ時刻を憶ひ出すとして、タダ物だと思ひきれるか？」と書いています。

なんでもない風景ということで、「君が幼な時汽車で通りかゝつた小山の裾の、春雨に打たれてゐたどす黒い草の葉などを、また窓の下で打返してゐた海の波など」も例に挙げています。――何ということなく通り過ぎたように思っていたところにこそ「生を愛した」その何物かが、〈消えぬ過去〉として潜んでいる。最近、特にこの中也の言葉が痛切に感じられます。

〈消えぬ過去〉は夢中で生きている時にこそ潜んでいるのかもしれない。時が隔たれば隔たるほどスポットが当たるように輝きだす……。皆さんは今、過去を振り返る必要のない場所にいます。でも大学院で過ごした時間が、皆さんにとっての〈消えぬ過去〉になっていることにずっとあとになって気づく、そんな時がいつか来ることを願っています。

旅立つことば

旅立ちのことば

初等教育学科　４年
伊澤　美香

都留文科大学での４年間は、私を成長させてくれる毎日の連続でした。私は「小学校教員になりたい」という夢を持ち、この大学に入学してきました。同じ志を持った仲間が沢山おり、常に刺激を貰いながら過ごしてきました。それは今も４年前と変わらず、仲間から学ぶことで自分自身の成長に繋がっています。恵まれた環境の中で、切磋琢磨し合いながら夢に向かっていくことの素晴らしさを実感できる場が、この大学の一番の良い所であると実感しました。

楽しい事ばかりではなく、苦しんだこともありました。３年次に行った教育実習です。初めて現場に入りましたが、毎日が時間との戦いだった事を今でも鮮明に覚えています。突然のハプニングなどに臨機応変に対応するのは教師の役目です。自分にこれをこなす事が出来るのか、教師になってもやっていけるのか…と迷いました。しかし、毎日変わらない笑顔で私に元気をくれる子どもたちや、子どもたちの話を楽しそうにお話する先生方を見て、私も子どもたちとあの様に関わっていきたいと強く思いました。この教育実習での経験は、一生忘れることはないでしょう。そして、ついに夢を叶える事ができ、ここで過ごした事、学んだ事、先生、仲間のことを思い出しながら、掴んだ夢への一歩を踏み出していきたいです。

また私は、芸術体育系ＡＯ入試でこの大学に入学したため、１年次から体育専攻生として活動してきました。女子バレーボール部に入部し、日々練習に打ちこんできました。多くの仲間と出会い、様々な考え方や価値観の違いを学び、私を人間的に成長させてくれたのではないかと考えています。特に私は、人と人との繋がりの大切さを一番に感じました。柳宏先生をはじめ、沢山の方々の支えがあったからこそ今のバレーボール部が成り立っています。それを決して忘れてはならないと強く思いました。

この都留文科大学で学んだことを教育の現場で発揮し、何事にも初心と感謝の気持ちを忘れずに旅立っていきたいと思います。ありがとう、都留文科大学！

バレー部の仲間たちと

４年間で得たもの

国文学科　４年
早坂美由起

年が明け、同輩との会話のなかに４月からの不安や希望を語り合う事が増え、その度文大で過ごす日々が終わりに近づいていることをひしひしと感じます。私が故郷・宮城県を離れてもう４年も経ってしまったのかと思うと、様々な思いが胸をよぎります。この大学で何を得たのか、と問われれば、私は真っ先に人の「輪」であると答えます。それは部活であり、様々な学科との関わりであり、或いは学外で得たものなどで、そのつながりは強固なものから一期限りの細いものがあります。その中でも私が一等大事にしているのが、３年生の時に得た２つの「輪」です。

１つ目は漢文学ゼミで得た「輪」です。寺門先生のご指導のもと、２年間漢文学を学びました。文意がわからない、典拠が見つからない、どう解釈すればいいのか分からない。そんなわからないことだらけのゼミが苦にならなかったのは、「わからない」と正直に口に出せ、お互い補い合い高め合えるゼミ生との「輪」があったからでした。毎日夜遅くまで額を突き合わせ、自分の考えをぶつけ合いながら何が最善なのかを見つけ出す。このような学びの体験ができたことは本当に幸運であり、それ

旅立つことば

が普通にできる「輪」を得ることができたのは僥倖と言えるでしょう。

２つ目は教員を目指す者同士で作った「輪」です。私たちが教壇に立った時、生徒へ何ができるのか、自分に足りないものは何か。普段ならこのような「お堅い」内容を語り合う事に些かの羞恥を覚えましたが、不思議とこの「輪」の中では本音をぶつけ合い熱く語り、鎬を削ることができました。SATや教育実習で見えた生徒の実態、それに関する意見を共有し問題点を明らかにしていくことで、私自身の視野を一層広げることができたと思います。

大小様々な人の「輪」が今の私を作り、支えてくれました。その全てに恩返しする気持ちで、４月からの新たな生活へと一歩踏み出したいと思います。４年間本当にありがとうございました。

漢文ゼミ一同

思いがけない出会いの中で

英文学科　４年
佐々木良

私は３月で、都留文科大学を卒業する。４年間を振り返ると、この都留の地に立った日のことを昨日のことの様に思い出す。果たして自分はこの何もない街でやっていけるのだろうかと不安に溢れた４月であった。それからの４年間は、あっという間に過ぎ去った様に感じる。見たもや感じたものは数多くあり短い紙面には全てを書ききることは出来ないが、その中でも、「出会い」「学び」という２点について記したい。

夢を追いかけ、その夢を叶えることが出来ず、挫折感とともに半ば消極的な理由でこの大学を選んだ私は、「きっと友達なんて出来ないだろうし要らない、教員になるためにまじめに勉強だけしていよう」と今から考えればふさぎ込んだ自分であった。そんな冷めた私のどこが良かったのか分からないが、私を気に入ってくれ友達付き合いをしてくれる気の良い友人達に偶然にも出会うことができた。付き合いは４年間続き、彼らと色々な馬鹿をやった。その本音の交わりの中で、予想もしていなかった自分に変容していった。それこそ、４年前の私が想像も出来ない様な「私」にである。友は挫折感と劣等感という牢獄に自分を縛り付けていた私を大きく変えてくれた。彼らは僕を救ってくれた。この経験から私は重要な事を学んだ。凝り固まりしなやかさを失ったときは、あれこれ頭で考える前に偶然の出会いの中に飛び込んでしまい、その潮流の中で変わりゆく自分を楽しむことが重要である。

かけがえのない友との出会いが私を変えたのと同様に、私の進路を変えた出会いも都留文科大学にあった。それは学問である。今井先生の温かなご指導の下、生成文法理論のもつ知的深みに魅せられ、この学問をもっと知りたい、この学問の中で「遊び」たいと強く願い大いに学んだゼミであった。教員になろうと進んだ大学であったが、まだ学びたいという気持ちが押さえられず大学院に進学することとなった。私の学びを支えて下さった学問上の父とも言える今井先生には感謝してもしきれない。

４月から、大学院生活が始まる。大変な毎日であろうが、やっていける自信がある。なぜならば、この大学で培った財産が私にはあるからだ。その財産をくれた友、恩師に感謝します。４年間ありがとうございました。

かけがえのない仲間たちと

旅立つことば

４年間を振り返って

社会学科
現代社会専攻４年
市川千尋

「いこいのひろば」。

私のこの４年間を回想したとき、欠かすことのできない言葉の一つである。地元を離れ、知らない土地での一人暮らし。大学生活への期待と若干の不安が残る１年の５月、先輩の紹介で知ったのが、学生、地域の方々と知的障害のある方々との交流の場として企画されていた「いこいのひろば」だった。

今年で４年目。月に１度の活動日の企画、準備、運営をするスタッフとして「いこいのひろば」に関わってきた。お祭り、バーベキュー、バス旅行、運動会、クリスマス会、餅つき…。気づけばたくさんの活動に参加してきた。

活動を重ねるにつれ、「いこいのひろば」での楽しみが、イベントに参加することで得られるものから、企画することから得られるものに変わっていったように思う。毎月、企画担当者が中心になって企画の立案、事前準備、活動日の運営まで取り仕切ることになるため、器用でない私は担当になるとかなり準備に時間を割くことになる。いざ会がはじまると、進行だけでいっぱいいっぱいの私には、イベント自体を楽しむ余裕などない。それでも、活動中、活動後の「楽しかった」とか「またやりたい」なんて声を聴いたりすると、自然と頬が緩んだ。

もちろん、落ち込んだこと、悩んだことも数え切れないほどあった。時に一人で、時に友人と、時に先輩・後輩と、時に地域の方々と、試行錯誤した時間は、私の視野をぐんぐん広げてくれたように思う。今振り返ると、私にとっては非常に意味深い経験であった。

卒業を目前にして、「いつでも遊びにきて」と言ってくれる人たちの言葉が本当にあたたかい。都留を離れても、ときどき「帰って」きたいと思う。

視覚障害のある私が、充実した大学生活を送ることができたのは、多くの直接的・間接的なサポートあってのことだと改めて思う。「いこいのひろば」のメンバーはもちろん、お世話になった皆様に、この場を借りて心から感謝申し上げたい。

2012年２月プログラム

1460日

社会学科
環境・コミュニティ
創造専攻４年
金塚　大

「1460日」――これは、私に与えられた未来を模索するための最後の時間だ。そして、今、この時間の全てを使い果たそうとしている。

思えば、私がこの大学に歩みを進めたのは、「教師になる」という明確な目標を達成するためだった。教師という道を選んだのは、高校２年の秋だ。この時期に決定的な出来事があったわけではない。強いて言うならば、家族の存在があったことだろう。私の妹は「筋ジストロフィー」という難病と闘っている。彼女がいたからこそ、私は多くの人に出会い、貴重な経験を積むことができた。本当に感謝している。これからたくさんの恩返しをしていきたい。

ところで、大学は「人生の夏休み」だと人は言う。この夏休み組のキメ台詞は「今しかできないことをする」である。確かに聞こえはいいのだが、私はこの常套句が大嫌いだ。老婆心ながら遠慮なく言わせてもらうと、大学の４年間とは、人生をより輝かせることもでき、棒に振ることもできる貴重かつ有限な時間だ。その時間の中で、平日はアルバイトに励み、週末はアルコールを浴び、長期休暇は海外旅行に行く。さぞ、楽しいことであろう。しかし、果たしてこ

旅立つことば

れは「本当に今しかできないこと」なのだろうか。つまり、これはマジョリティに流されることなく、本当に「今」必要なことが何かを自問自答すべきということであり、あまりにその姿勢が欠如していることへの警鐘である。この学び舎を離れるとき、４年間を全力で駆け抜けた者は自身に誇りを持ち、さらなる高みを目指し旅立って欲しいと願うとともに、多くの者にその感覚を味わって欲しい。

私自身、「教師になる」という至上命題はクリアした。４年間の手応えとしては充分だ。次の目標は教師としての金塚大という名を轟かせるとしよう。10年後。いや、遅くとも15年後には実現していたい。さて、番組は何にしよう。プロフェッショナル・仕事の流儀もカッコいい。情熱大陸も魅力的だ――本当に「夢」とは尽きないものである。

継続してきたボランティア活動（ひだまりの会お泊り親睦会in栂池2012での集合写真）

旅立つ言葉

比較文化学科４年
Nils Olle Berg

都留？何もないよ。

なんでこんなド田舎に来たんだろう。

…といったセリフは、文大生なら聞き覚えはあるだろう。ネガティブな意味合いで吐き出されることが多いと思われるが、私にとってこれこそ都留の良さだ。

入試前に以前この大学を受けた日本語学校の先生に「すごい田舎だよ」など言われたので、北欧出身の私は当然田んぼ、畑、牧場ばかりのところを想像して期待していた。そしてがっかりした。北欧人にとって都留は田舎要素が少な過ぎてかなり中途半端だったからだ。それでもできるものなら都会に住みたくない自分には都留の落ち着いたペースと生活しやすさがとても合う。（後者に関しては、歩いて10分が遠く感じるという狂った距離感覚がものを語る。）山と森もすぐ近くにある。少しくらい自然と接しないと魂が枯れるので有難い癒しである。

遊ぶところだってある。確かにお店とかは少ないが、その分自然があり、山歩きや山登りはできる。そして何より、自宅や友人の家という最高の遊ぶところはある。学生のほとんどが近くに住むという環境は他大学に比べればかなり特殊で、他大学の学生がかなり羨ましがるところだということを考えれば、都留は本当に恵まれた場所に見えてくる。これほど気軽に友人を家に誘ったり、遊びに行ったりすることができる大学は日本では相当少ないはずだ。私の場合、大学生活の一番の思い出は勉強でもサークルでもなく、自宅や友人宅でやった食事会、ゲーム会、TRPG会、映画鑑賞などなど、一言で言うとただ友達と過ごした時間だった。

ところが、都留のこの良さを最大限に活かしてきたとも言えない。日本の同調性や建前・本音の文化、独特の価値観と苦戦しながら生活している中、仲良くなりたい人と仲良くなれず、仲良くなったと思ったら手放してしまったといった例も多々あった。しかし、それでも幾人かのかけがえのない人に出会えたことは、それでも有意義な時間を過ごした証に思えてならない。次の４年もこのままいたいくらいだ。

（実は働きながらまだ１年います。見かけたら声かけてください！）

文大の友人と帰国中

旅立つことば

旅立つ言葉

文学専攻科教育学専攻
入倉こころ

私は、学部時代初等教育学科に所属し、全国から集まる仲間たちとともに学んできました。この環境と、教授たちとのもとでさらに学び、現場へ出る準備をしたいというのが、本学の専攻科への入学を決めたきっかけでした。

入学した当初は、大学卒業後すぐに現場に出た仲間たちが、教員として経験を積んでいることに良い刺激をもらっていたことと同時に、試験に向けて黙々と机に向かうことしかできない自分にもどかしさや、戸惑いを感じることもありました。しかし、この戸惑いの中にこそ、自分の求めている理想や、これまで見えなかった視点が生まれていたのかもしれません。また、試験勉強とその先にある教師になってからを結び付けられることで、専攻科で学べるこの時間が尊いものであることを実感し、自分と向き合いながら取り組むことができました。これらは、不安を共有してくれた専攻科の仲間たちや、温かく支え見守って下さった先生方、大学の職員の方々がいてくれたからこそ感じられたことです。一年間を通して、お世話になったたくさんの人の顔と、いただいた言葉や想いが思い出されます。本当にありがとうございました。

これから卒業をして、４月からは都留の地を離れて、それぞれの道へ進んでいきます。今年度の専攻科生は、５人という例年に比べて少ない人数ではありしたが、その分一人ひとりの考えを丁寧に出し合い、聴き合いながら毎回の講義を積み重ねてきました。教育について語り合う中では、時に、自分の弱さに直面したり、過去の辛い体験を思い出したりする場面もありました。しかし、そんな時もじっと耳を傾け、真剣に表現してくれる人たちがいるこの場所があったおかげで、少しずつ確実に成長できたと思います。この貴重な体験や学んできたことを希望にかえて、今度は子どもたちと共に、希望を紡いでいけるようこれからも、様々な人々との繋がりの中で、学びつづけていきます。

言葉と文字にとじこめない詩の授業について

今、ここ

大学院国文学専攻
柳沼　希

平成20年４月５日。見知らぬ土地で、初めてのひとり暮らし。不安と心細さを抱え両親の車を見送ったあの日から、早いもので６年が経とうとしています。思い返せば、多くの方々に刺激され支えられた学生生活でした。

４年間所属していた氷上部では、地域の方々に助けられて大会の運営や記録会参加の機会をいただき、全国から集まった部員と、様々な価値観をすり合わせる難しさとそのやりがいを学びました。先生の人柄に惹かれて入ったゼミでは、研究において、学問的なことに限らず幅広い知識をもって問題に切り込む大切さを教わりました。楠元六男先生には進学後もお世話になり、修士課程１年次には近世資料文書研究会会員として、ミュージアム都留での展示や本の出版に携わることができました。

大学院での２年間は、授業に備え、毎晩10時まで院生室にこもって調べ物をしてきました。気付くと、校舎の施錠をして回る守衛さんに顔を覚えていただくまでになっていました。毎日使用した本部棟４階のお手洗いには、季節ごとに綺麗な花が飾られています。この清掃員の方の心配りには、悩み落ち込む度に元気づけられました。たった

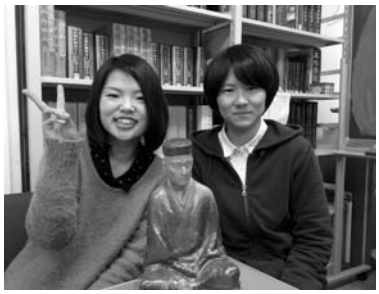
旅立つことば

あっという間の大学生活を振り返る

大学院社会学
地域社会研究専攻
水野祐樹

一人の同期とは、授業も教員採用試験も修士論文の執筆も、互いに励まし合いながら取り組んできました。先輩方には、教員採用試験の対策や授業・修士論文についてなど、細かな悩みも親身に聞いていただき、先生方は、密度の濃い授業をしながらも教員採用試験や修士論文の執筆を、厳しく且つ温かく応援してくださりました。中でも指導教員の加藤敦子先生には、修士論文提出の前日まで繰り返し丁寧なご指導をいただき、大変お世話になりました。そして両親は、進学や就職活動で悩んだ時に、「大丈夫」「やってみなさい」と力強く背中を押してくれました。

４月からは新たに教員としての生活が始まります。今、ここに立つ私には、６年前には想像もつかないほどたくさんの支えがあります。そのすべてに、この場を借りて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



私と同期と芭蕉と

まさか都留に７年間も通うとは思ってもいなかったことで、そしてもう卒業する時期がきたのだと…ただ驚くばかりです。私は国語の免許も取得するために５年間大学へ通い、その後は大学院へと進学しました。今この瞬間にきて、過去を振り返る怖さを感じていますが、ここはひとまず、勇気を出して振り返ってみましょう。

まずは勉学についてです。大学に入学してからしばらくはどのように学んだらよいのか分かりませんでした。高校までの教育と断絶があり、暗記することが勉強とすら無意識的にも考えていたと思います。何がきっかけでそれが違うと気づいたのかは思い出せませんが、学ぶことの奥深さと厳しさについて思い知らされているのが現状です。

次は人づきあいです。大学での仲間や先生方には感謝の倍返しをしたいくらいです。楽しい時は一緒に楽しんで、悩んだ時は励ましてもらったり、アドバイスをもらったりして、不安を和らげてもらいました。私にとってそれはどんなに心強かったことか、思い返すたびにやさしい気持ちになります。また、妙に印象強く残っていることがあります。大学１年生の４月、１号館での説明会か何かの後でしたが、気がついたら掲示板の前で同じ社会学科のメンバー十数人が円になって集まっていました。みんなの期待と不安が結晶化した連帯のようなものができあがっていましたが、そこでいろいろな話をしたり、連絡先を交換したりしました。その後の大学生活を考えると、これが友達づきあいの本格的なスタートだったのだろうと思います。寒さがまだほんの少しだけ残る晴れの日でしたが、とてもあたたかく感じられるひと時でした。まだまだたくさんの思い出があり、この場で感謝の気持ちを一人ひとりに伝えたいのですが、そうもいかないようなので、せめてその気持ちがあることだけは受け取ってもらえると嬉しいです。

このように振り返ってみると、文章と言葉ではおさめきれないたくさんの思いが湧いてきます。これらたくさんの思いを大事に抱えて、大学から新たな一歩を踏み出していきたいです。

２年間を過ごした大学院生室

旅立つことば

都留での６年間

大学院英語英米文学専攻
高野祐一

私が都留に来てまもなく６年という歳月が過ぎようとしています。今この６年間を振り返ってみると、長いようであっという間の６年間であったように思います。

私が本大学の英文学科を経て大学院にいこうと決意したのは、大学４年生の時でした。教育実習の経験から、将来教師として働いていくためには知識がまだまた足りないということを実感しました。また、大学院で専修免許を取れるということも、進学を決意したきっかけでした。本大学の大学院に行くにあたって、これからどのようなことを勉強していくのだろうかという期待もありましたが、それと同時に不安も感じていました。そのようななかで私にとって大きな支えとなったとなったのは、学部時代に指導してくださった先生方の存在でした。大学院に行っても、その先生方がいらっしゃるというのはこの大学院を選ぶ上での大きなメリットにもなりました。大学院での学びを通して感じた印象は、その学びの内容の濃さでした。課題の多さはもちろんですが、学んだことを他のこととどう関連付けていくのかを考えることの重要性を認識し、これまでとは異なる学びができるようになったと思います。授業も少人数、あるいはマンツーマンであったため、先生と距離の近い形で行われていました。特にマンツーマンの授業においては、多人数クラスでは聞けないような細かい部分も質問することができ、１つ１つ分からないことを確認しながら勉強をしていくことができました。こういった恵まれた環境下で勉強できたのは、私にとって非常に有益で貴重な体験だったと感じています。

これから都留での学生生活を終えて新たな一歩を踏み出していくことになりますが、これまでに学んだことを精一杯生かしながら頑張っていきたいと思います。最後にこの６年間で指導してくださった先生方や学生生活を支えてくれた友人、大学院の学友に対して心からの感謝を申し上げたいと思います。６年間本当にありがとうございました。

大学院の研究室にて

学ぶことを楽しむという意識

大学院比較文化専攻
岩間祥也

私は学部生、院生時代合わせて６年の間、都留文科大学に在籍した。この６年という期間は、私自身が「学ぶことを楽しむ」という意識を持つことができたという意味で、非常に大きいものになった。大学院への進学を行ったのも、この意識の下、自身がより深く学びたいと考えたからだ。

楽しむことを知ったのは、私が学部生時代において講演会の企画や運営に携わったことにある。企画立案は当時所属の比較文化学会事務局の局員がよくプランを提供していた。私自身はそのプランを具体的に企画として成立させ、実行していくかの調整役を担っていた。当初は企画が興味のない内容であった時もあるが、運営を行う中で、自然と自身の学びとなっていった。新たな知識や視座を提供されることに楽しみを覚えていた。

院生時代は外部との関わりを持つ機会が多かった。目的は論文作成のためではあったが、外部で開催される勉強会へ参加したり、研究対象の活動を行う人へのインタビューなどを行うために単身京都を訪れたりもしている。そうした人と人との関わりの中で、何らかの視座を見出すことも多かった。こうした活動は確かに準備の段階では相応

旅立つことば

都留での６年間―本当の「わたし」の萌芽・育ちの軌跡―

大学院臨床教育実践学専攻
平山雄大

の苦労を伴うものであるが、それすらもある種の楽しさを持って受けとめ、研究に取り組んでいた。

また、院生室で研究を進める同じ専攻の院生の存在が継続的な取り組みの支えになった。彼らはそれぞれに研究テーマを持ち、その内容に真剣に取り組んでいた。時にはお互いの進捗状況を話し合うことも行った。そのたびに自身の説明や論理の欠陥を反省させられるとともに、再度内容に向き合うことを行ってきた。その中での視角すら、私自身にとっては学びになりうるのだと気が付いた。

この「学ぶことを楽しむ」意識はこの６年で私の中にしっかりと根付いたように思う。この意識を強く持つことになった学生生活とその中で関わった全ての人に感謝をするとともに、これからもこの意識を大切にしていきたいと思う。

「遊ぶ〔jouer〕という動詞には二種類の意味作用を区別してやったほうがいい。一方は、自己の実存中にときどき遊ぶ人間の、遊ぶこと（すなわち遊戯的《プラクシス》）…である。もう一方は、自己意識を構成する不可欠のものとしての、主体内の遊戯であり…それは遊戯的《プラクシス》そのものをなりたたせるだけではなく、想像し、意志しうる自覚的実存のあらゆる形式をなりたたせるものである（P.154～155）」と哲学者であるジャック・アンリオは言う。「《わたし》という遊ぶ存在は、遊ぶことに先立ち、それの基盤となる（P.155）」―。

受験直前に第一志望に決めた都留文科大学、同じく直感的に魅力を感じて選んだ臨床教育学、埋もれていた本当の「わたし」に出会えたおもちゃ売り場でのアルバイト。この３つの場との出会いの中で、私は罪悪感で生きていた自分を越えて、自らの想像と意志で新たな「自分」を選択し、投企するという、アンリオの言うところの「遊ぶ」ことが出来る主体になれたように思う。客観的に見たら、私は遊んでなどいないように見えたかも知れない。しかし、アルバイト先でのおもちゃのイベントを通して「マニュアル」では決して語れない子どもたちの生きる姿に出会い、そこで感じたことを学びへと繋げることで自らの在り方を考え続ける日々の中で、私は紛れもなく「わたし」であった。自らの想像と意志で以て新たな自分を投企すること、「それは自分でどこへ行くのかを知らないということだ。たとえ前もって丹念に段どりを準備し、効果を計算していたにしても、その点に変わりはない。それは、先がどうなるものやら、あらかじめ知ってはいない冒険へ身を投ずることである（P.124）」。支え続けて下さった先生方、仲間、アルバイト等で出会った方々、そして家族への感謝の思いと、都留での６年間の中で出会った「わたし」を胸に、新たな「冒険」へと身を投じていきたい。

（引用文献：ジャック・アンリオ／佐藤信夫訳『遊び―遊ぶ主体の現象学へ』1969年／2000年、白水社）

学部時代の恩師、山﨑隆夫先生と

初等教育学科　平成25年度卒業論文題目

麻場　一徳ゼミ

大川　　栞　諸外国と日本の体育カリキュラムについての一考察
川上　裕加　小学校体育「陸上運動（走り幅跳び）」の授業における身体能力（体力）の取り扱い方
川﨑　　葵　血液性状からみたコンディションに関する研究―都留文科大学陸上競技部員の場合―
佐藤　　綾　三段跳の助走における助走距離と助走スピード、踏切局面との関係性
髙須美由紀　やまびこ記録会の変遷からみた陸上競技の普及に関する一考察
高橋　優香　４×100mRにおけるバトンパスの分析―練習時の40mバトンパス測定がレースとどう関係するか―
竹山由希子　陸上競技４×400mRのレース分析―通過タイム、通過順位、バトンタイムに着目して―
西田　彩乃　短期間低酸素トレーニングの効果に関する研究―陸上競技スプリント系選手の場合―
堀内　貫平　各大会における４×100mRの比較・検討
山崎　稚奈　都留アスリート倶楽部の実践と成果に関する研究
長田　昇平　小学校体育「体つくり運動」の授業への体幹トレーニング導入に関す研究

市原　　学ゼミ

浅沼　大樹・池田　祐磯・志田　隆宏
項目反応理論による大学生用精神健康調査の検討と改訂（３）
小林　聡史・片野祐太朗
項目反応理論による大学生用精神健康調査の検討と改訂（２）
長田　　彩・小関　麻美・佐藤　桃子・橋本　亞美
項目反応理論による大学生用精神健康調査の検討と改訂（１）
中村　友美・松田わかな・山形勝香月
項目反応理論による大学生用精神健康調査の検討と改訂（４）
百瀬　祐一　項目反応理論による大学生用精神健康調査の検討と改訂

岡野　恵司ゼミ

末木　翔大　数学嫌いを減らすために―江戸時代の数学「和算」と「算額」の紹介と問題―
村山　華子　∞のふしぎ―その歴史と数学的無限について―
吉田　千晶　小学生の算数でのつまずきについての考察とその解消について

春日作太郎ゼミ

戸川今日子　青年期の攻撃性とコーピングの検討
根本　渓太　検索試行が記憶および体制化に及ぼす影響

後藤　道夫ゼミ

青木　彰仁　建設業の重層的下請け構造について
岩波　　駿　東日本大震災後の被災地における教育
川俣早百合　生活保護の研究
斎藤　淳基　民間委託された職場での労働者
佐藤　　諒　社会階層と教育
土橋　萌未　学校における「いじめ」の研究―いじめ自殺事件から「いじめ」問題について考える―
畑島俊太郎　日中戦争に対する授業方法

坂田有紀子ゼミ

小森　夏実・米山みなみ
カワラナデシコの保全を目指した教材づくり―地域の身近な植物を子どもたちに知ってもらうために―
鈴木　陽花　都留市城山におけるカワラナデシコの訪花昆虫と種子生産量との関係
塚本　真央　富士山精進口登山道付近のテンの食性―フンからの伝言―
根岸　遥平・眞壁　一輝・吉田　健志
都留市の３つの河川におけるカジカの生態：エサ資源と物理的要因に着目して
原　加奈子　教科書から見たフィンランドの理科教育―日本とフィンランドの比較―

佐藤　　隆ゼミ

牛丸　紗江　教師に求められる子ども理解とは
生山　由希　教育技術法則化運動―本質的な授業を求めて―
小宮山　愛　教師を楽しむということ―「子どもと学び子どもから学んだ教師の記録」の筆者岸康裕の実践から考える―
高橋美紗輝　これからの外国語活動にもとめられるもの
名賀　優子　学習集団授業の研究―安富南小学校の実践を通して―
中西美由紀　今日求められる教師像―霜村三二のライフヒストリーを辿る―
林　　耕大　教員の困難と支援
藤輪　翻大　学校現場における開発教育の可能性
星　なつみ　震災後にみる教育行政と教師
堀内　　萌　長野県辰野高校における実践の意義とは

清水　雅彦ゼミ

折本真由美　音楽教育の可能性―うたうということ―
片岡　梨菜　音楽と向き合うために
―音楽教育の課題と可能性から―
西室　　旭　歌に込める想い―音楽と祈りの関係性から―
福重　　匠　聴覚障害者の音楽との関わりについて
槙原明日美　自発的に表現する力を育てる音楽教育
待井　詠里　学校現場における音楽の効果

椙守　光恵ゼミ

有水真理恵　子どもの音楽表現とその可能性―初等教育におけるスクールバンドの指導について考察する―
石塚　沙綾　ベートーヴェンのピアノ作品
―32の変奏曲を中心として考察する―
五影　有莉　ドビュッシーの音楽の世界観
―絵画と音楽を結びつけて考察する―
近藤　　瞳　ブラームスの生涯とピアノ作品
―ピアノソナタ第３番を中心として考察する―
新村　夏佳　シューベルトの生涯と音楽作品
―歌曲とピアノ曲に共通する「叙情性」について考察する―
武山諒太郎　黒人音楽の発展―文化的な背景や視点から考える黒人音楽の変遷―
三浦　史帆　小学校における音感教育
―身体運動と音楽の関係性から考える―
湯澤　祥子　ウェーバーを追求する
―舞踏への勧誘に込めた想いを求めて―
吉岡　敬信　周辺教科の重要性
―音楽・図工・体育を通して感性を磨くために―

添田　慶子ゼミ

岡田　大志　甲子園―歴史と制度から、より良いものへ―
奥山　裕人　スノーボードに関する研究
小林　祐太　ナチス政権下におけるベルリンオリンピックの研究
杉本　和也　体の変化―発達期における体の成長―
田中　涼平　制球に着目したウインドミル投球の動作の分析研究
廣瀬　奈菜　ソフトテニス競技におけるジュニア期の運動経験が及ぼす影響

平　和香子ゼミ

青山　友香　食育に関する学習内容を取り入れた教育実践の効果
青山　結香　小学校家庭科食領域における保育学習の教育実践
岡島　宏太　教員志望大学生における食物アレルギーに対する意識に関する研究
酒井　　響　福島県産農産物に対する大学生の意識と消費行動に関する研究
竹内真里奈　小学校家庭科における手指の巧緻性向上を目的とした授業実践
橋本　直樹　野球における投球動作と瞬発力の関連に関する研究―高校生硬式野球部員を対象にして
本田ともみ　小学校家庭科食領域における食文化の伝承を目的とした教育実践

高田　理孝ゼミ

芦川　桃子・大黒　直人・根本　渓太
検索試行が記憶に及ぼす影響
石本　美喜　日常生活における物忘れの要因について
清水　秀太　色に対するステレオタイプ的認知と色嗜好試行傾向の関係
田澤　　俊　間人度と状況が間接的攻撃に与える影響について
戸川今日子　青年期の攻撃性とコーピングの検討
溝渕　祐平　欺瞞行動と罪悪感の関連について

竹下　勝雄ゼミ

宇部　美里　映像表現の可能性
―ストップモーション・アニメーションから―
大塚　　杏　読書教育の可能性
―『バムとケロシリーズ』を通して―
竜田　栞理　絵本の魅力―美術的視点からの一考察―
土屋　壮司　表現活動における支援についての一提案
中谷　仁美　図画工作における絵と色の教育
火石　知音　藤田嗣治の絵画表現
―連作『小さな職人たち』における世界観―
松山　天理　図画工作科と他教科との関連
光岡　聖矢　小学校図画工作における児童の自己表現
南川　恵美　現代の課題から考える幼児と造形遊びの関わり

田中　昌弥ゼミ

饗場めぐみ　子どものコミュニケーション力を育む学級づくり―発達障害児（ADHD）と共に学ぶ場を目指して―
大石　真理　中学生の友人関係と自己との関わり―中学生と大学生に対するアンケートの比較を通して―
大島歌那子　デューイは本当に児童中心主義か
―新教育運動を現代の教育に活かす―
久保田晃宇　学習を軸とする学級づくり
―折出健二の生活指導論の考察を通して―
栗岡　知代　地域を学ぶ授業づくり
中村　優希　今日における一斉授業の可能性―久保斎実践の一斉授業と習熟度別授業の比較を通して―
比嘉　光代　多様性の中で成長しあう学級づくり―子ども理解を中心とする教育実践の検討を通して―
森　　拓哉　子ども理解に基づく教育実践の可能性と課題
―田中孝彦の教育学に着目して―
山根　菜穂　教師と子どもが求めるよりよい関係の考察
吉野　洋実　発達障害を抱える子ども達への支援―アメリカ・イギリス・スウェーデンとの比較から―

筒井　潤子ゼミ

五十嵐茉美　被虐待児とのかかわりからみえてくるもの　教師としてできることとは
井澤　　貢　労働者としての教師
一力　彩香　童話から考察する本による子どもへの影響　本とどう付き合っていくべきか

魚住明日香　特別支援教育を考える　個々のニーズに合わせた教育とは
大野　美咲　愛着の問題と子どもたちの人間関係づくり
木曽佳奈子　ほめる教育と自己肯定感のめばえ　ほめることの本質を考える
儀間　　彩　憎悪のエネルギーと向き合う　感情をコントロールできない子ども達

鶴田　清司ゼミ

中曽根知弘　話し合いにおける司会力の研究
中野　晃宏　文法学習とつなげた文章読解
根岸　陽月　効果的な漢字指導―白川漢字説に基づく授業づくり―
松宮　大地　これからの国語科における読書教育
村松　兼斗　書く力を育てる作文指導―短作文の評価と処理―
矢野　礼佳　どの子も書ける作文指導のあり方

寺川　宏之ゼミ

谷内　曜子　パラドクスの世界
若林　沙希　整数論―完全数について―
輪野　陽平　確率について

鳥原　正敏ゼミ

富山亜紀穂　今日の図画工作科における臨画教育の可能性
成田　　萌　豊かな心を育む図画工作
新見　文菜　子どもが安心して自己を表現できる環境づくり
仁藤　春奈　教員養成の在り方への一提案
―東京教師養成塾での学びを通して―
早坂　駿吾　感性を育てる図画工作―表現する力の可能性―

中井　　均ゼミ

井澤　　滋・北出　千晴・松浦みずほ
沖縄本島の海岸砂の研究　其の三
大迫美紗都・坪野　梨栄
河口湖天神峠下石灰岩の堆積相と含有化石の研究
小笠原彩乃・吉永　若葉
都留の地学教材の研究―菅野川流域―

西本　勝美ゼミ

中納　秀人　主体的な労働を考える
―若者が働きたくなる仕事のかたち―
畠中　愛理　子どもの幸せを支える教育
―意識の壁を作らないために―
藤本　修平　地域でつながり学校を拓く
三井　結生　競争の学力から生きる学力へ
―集団のなかで生き方を学ぶ―
満田菜都美　安心して過ごせるクラスを目指す
―孤立させない関係づくり―
山浦　友華　『自分を誇りに思える』学校へ
―他者とつながり生きる実践に学ぶ―
和田さつき　支え合う仲間づくり
―自分を好きになり他者を認める―

西山　利佳ゼミ（藤本　　恵ゼミ）

池田奈津子　小説に浮かび上がる現代の暮らし―『れんげ荘』『銀河不動産の超越』を例に―
一瀬　　梢　『ピノッキオの冒険』から読み解くディズニー論
岩間みずき　岡田淳『選ばなかった冒険―光の石の伝説―』論―選べなかった世界で選ばなかったもの―
金山　愛里　宮西達也の絵本からみる家族
―ウルトラマンシリーズ・「ティラノサウルス」シリーズをもとに―
我那覇志穂　目取間俊「風音」三作品の比較
後藤　美樹　重松清が描く教師像
―『青い鳥』の村内先生を中心に―
佐々木千尋　『サマーウォーズ』家族とジェンダーから見るつながりの形
笹本　有希　小野不由美「十二国記」シリーズ論
―外と内を縛る二重の制約―
佐野友里子　家族崩壊を描く林真理子の真意

箱石　泰和ゼミ

市川裕香乃　教材解釈と授業展開
面谷　理絵　学び合い学習の検討
野上　修平　学級崩壊したクラスの学級経営のあり方に関する考察
松山　香織　茅ヶ崎市立浜之郷小実践の検討
森崎　日菜　仮説実験授業の検討

平野　耕一ゼミ

池宮　秀平　なぜブーメランは戻ってくるのか
―歳差運動とその応用―
伊藤真由美　倒れにくい家をつくる―共振と耐震性―
江川　大貴　圧電素子による発電の可能性と再生可能エネルギーの実用性
土屋　　稜　小学校における自然体験学習と環境教育
松浦穂奈美　原子力発電における問題とその影響
―それに伴う放射線教育とは？―
丸山　陽香　通常学級で活かす特別支援の理科教育
宮脇　　梓　理科離れの現状と、可視化による物理学習の理解促進について

森　　博俊ゼミ

天野　温子　特別支援学校高等部の就労支援特別支援学校高等部職業課の実践を手掛かりにして
一島　あい　通常学級における特別な支援と学級づくり
上野　智司　障害を持つ子供の家族の困難と困難を「乗り越える」ということ
金海　里奈　友人関係に「悩む」子どもの理解
桑原　理花　ケアと教育　『道徳性の発達』の観点から
柴田　真子　きょうだいが「生きること」への困難と支援
田中　里歩　困難を抱える子どもにとっての山村留学の意義

柳　　宏ゼミ

伊澤　美香　体力・運動能力トレーニングがもたらすバレーボール技術への効果

—都留文科大学女子バレーボール部員の場合—
入倉　修理・堀口　　司
体罰についての研究—その現状と定義—
鈴木　里奈　バレーボール・ゲームにおけるディグと勝敗の関係
千葉　　単　B-TRインソールの使用が運動能力に及ぼす影響について
晴澤　なな　バレーボールスパイクの動作分析
—クイックの場合—
深澤　有菜　一輪車技術の指導法研究—映像を用いた指導—
百瀬　素直　バスケットボールスリーポイントシュートの研究—シュート成否と身体能力の関係—
矢田　裕太　バレーボールにおけるサーブとルーティンの関係について—サーブの成否に着目して—
吉原真理子　サッカーゲームにおける得点時間帯と勝敗の関係

山崎　隆夫ゼミ

岩田有希子　現代を生きる子どもの生きづらさ、その支援のあり方を考える山崎隆夫の教育実践を通して
小澤　香織　「よい子」の苦しみと自己表現
香山祐里佳　どの子にも自己肯定感を育む授業・学級づくり
佐伯　彩乃　いじめと向き合う　教師としてできること
嶋田　結歩　思春期の子どもが抱える心の叫びとその願い
学校や家庭で“荒れる”子どもから考える
鈴木　菜月　臨床教育学の観点に基づく「生徒指導」の在り方
鈴木　　萌　不登校の子どもの心と自立
松村　沙紀　子供の育ちとしつけ

山森　美穂ゼミ

石川　温子・渡辺　拓也
小学校理科における発見学習と有意味受容学習の効果
神谷はる菜　小学生によくわかる燃料電池の実験教材の研究
木村　盛貴　児童の新しい知識や思考の習得と素朴概念
小林　　圭　都留文科大学周辺に降る雨の硝酸イオン濃度
—季節変化とその特徴—
樋口　奈菜　電磁石に対する苦手意識をうまない授業の研究

国文学科　平成25年度卒業論文題目

上代文学　鈴木　武晴ゼミ

阿久津　陽　天照大御神の女性像
池田　恵里　『日本霊異記』の転生と牛
内田　真菜　ヤマタノヲロチ伝承の研究
金井　美緒　人麻呂の「事霊」と憶良の「言霊」
河合　洋子　行路死人歌と古代社会
島田　未来　黄泉戸喫と食物—生命と火と絆—
清水　春那　記紀万葉における「玉」
鈴木　志野　建御名方神—土着信仰と記紀神話—
巣山　和香　日本における胡桃の文芸と文化
鷹取　美里　記紀と吉備
玉木あいみ　万葉の花に見る女性像
藤井　彩乃　黄泉国神話
藤谷　育美　万葉の芸謡
望月　香那　万葉集における桜
栁澤　加菜　コノハナノサクヤビメと富士信仰
岡田美和子　タカミムスヒとカムムスヒ

中古文学　長瀬　由美ゼミ

赤間　圭城　『土佐日記』論
小滝　真弓　平安文学における〝夢〟の諸相
清水　彩紀　『紫式部日記』の消息文的部分について
白石麻里子　『源氏物語』六条院春の町の庭園
鈴木裕紀子　『堤中納言物語』「貝合」の童たち
塚原　結貴　『落窪物語』の侍女あこきについて
村田久瑠美　『伊勢物語』の女性の姿—二十三段を中心に—
藤澤　知穂　道綱母の心境の移り変わり—文体・表現を軸に—

中世文学　佐藤　明浩ゼミ

伊藤　遼奈　慈円の月の歌について—新古今歌人と比較して—
牛丸　景太　『新古今和歌集』橘歌群の特性
—歌境の深化とその背景について—
芹澤　広悦　『方丈記』の和歌的表現について
馬場　美里　『平家物語』における神仏への信仰
—平家一門と厳島神社との関係性—
堀越　千夏　後鳥羽院和歌にみえる信仰
宮原　英里　稚児物語について—秋夜長物語を中心に—
山田　友美　説話の中の怨霊—『今昔物語集』を中心に—
吉成　裕隆　武士説話について—『今昔物語』を中心として—
渡邊佳津子　中世仏教説話における蛇

近世文学　加藤　敦子ゼミ

秋山　佑理　浮世絵に見る源氏物語—見立て絵を中心に—
加藤　郁美　近世初期浮世草子と西鶴
川上　知里　『父の恩』研究—歌舞伎役者の追善集として—
熊谷　恵莉　幕末における士道観
菅原　斐子　松尾芭蕉『おくのほそ道』における尾花沢の句の解釈について
髙木　成子　紀海音『八百やお七』と小野小町
武田　由希　『東雅』にあらわれる新井白石の国語観・国語研究観
他力　桃子　近世における実録文学の研究
—「尼子十勇士」物—
原　　成美　『小説神髄』から見る近世・近代小説
三田　量子　『奥州安達原』の研究—“一つ家の段”について—

近代文学　阿毛　久芳ゼミ

阿部　友美　高村光太郎『智恵子抄』論
池田　小珠　『燃えよ剣』論―土方歳三の人物像について―
岩元龍太郎　清水義範「国語入試問題必勝法」論
遠藤佳乃子　『海と毒薬』論―海と人との関わり―
遠藤　彩花　辻村深月『ぼくのメジャースプーン』論
小笠原春香　まど・みちお論
―存在と非存在における自己肯定―
久保田詩織　現象的でない「生きる」とは―『完璧な涙』考―
小林　真衣　吉行淳之介の視線―『原色の街』から『驟雨』へ―
坂本　純子　川端康成『眠れる美女』論
武田芽久美　伊坂幸太郎『グラスホッパー』論
中村　梓　『西の魔女が死んだ』を読み解く
―少女の成長から見えてくるもの―
西川　明歩　行進の意味―小川洋子『ミーナの行進』論―
野地　加純　金原ひとみ『AMEBIC』論
橋本　佐助　竹内浩三論
袰岩　亜紀　安房直子の世界―『白いおうむの森』を中心に―
吉田　美幸　吉田ばなな『キッチン』論

近代文学　新保　祐司ゼミ

今田　茜　江戸川乱歩『パノラマ島綺譚』
大内　一真　芥川龍之介の死生観について
加藤　彩佳　司馬遼太郎『坂の上の雲』
―映像化に至った背景をめぐって―
包原　智史　森鷗外がドイツから受けた影響
河阪　美怜　「日本文学から見る日本人と桜」論
篠原　結実　日本文学における「秋の悲哀」論
清水　聡之　山本有三論
千田　稔　「草枕」論―『意志と表象としての世界』より―
寺町　佳菜　『注文の多い料理店』でみるイーハトヴ
早川　育穂　武者小路実篤「新しき村」論
前田　要　『武士道』から学ぶ日本人の心
松下　尚悟　近代文学とキリスト教
松島　翔　智恵子抄論―詩中の智恵子の変遷について―
渡辺　貴大　司馬史観における歴史認識とその影響

近代文学　野口　哲也ゼミ

相河　愛　太宰治『人間失格』論
―“人間”として生きるということー
柏木　広大　安倍公房『壁』論―「S・カルマ氏の犯罪」と「赤い繭」に見られる「壁」について―
菊川　駿　遠藤周作『海と毒薬』
―生体解剖事件における罪と救い―
小鹿　幹季　「銀河鉄道の夜」の虚構と孤独
杉山加奈恵　芥川龍之介『藪の中』論
反田　咲穂　三島由紀夫『サド侯爵夫人』論
鷹野　尚弥　村上春樹「納屋を焼く」論
―虚構と同時存在について―
名古屋美貴　江戸川乱歩「押絵と旅する男」論
―閉ざされた空間と人形愛―
根村　燈　森鷗外「文づかひ」論―自己矛盾の苦悩ー
程原　祥子　谷崎潤一郎「少年」論
山崎　三貴　三島由紀夫「翼―ゴーティエ風の物語―」論
山寺安良輝　深沢七郎「楢山節考」における精神性の過去と現在
山本祐太朗　村上春樹『神の子どもたちはみな踊る』「かえるくん、東京を救う」論

近代文学　原　卓史・古川　裕佳ゼミ

奥野　史明　芥川龍之介『少年』論
木村　茉優　河野多恵子「幼児狩り」論
佐藤　沙織　北杜夫「狂詩」論
中西麻由美　遠藤周作『海と毒薬』論
―看護婦・上田ノブを中心に―
松本　沙織　佐藤春夫『田園の憂鬱』論
徳本　隆史　岡本かの子『鮨』論

国語学（古代語）　中川　美和ゼミ

木下　佳奈　上代日本語における接頭辞「ま」の研究
笹山　佳代　『とりかへばや物語』における補助動詞「はべり」に見る位相差
中村　友希　名古屋市博物館蔵『三宝絵』における書き入れについて―諸本による差異の考察―

国語学（近代語）　鈴木　芳明ゼミ

有田　侑嗣　マンガに用いられるオノマトペの役割と分類
石橋　諒一　２ch・ニコニコ動画・twitterに見るインターネットスラングの研究
岩木　良樹　J-POPにおけるカタカナ語
岡林　利晃　明治以降における「ゼロ」の変遷について
勝部　佑哉　日本語の雨に関連する表現の性質
小柳　翔　カタカナ略語から見る略語形成方法
髙橋　未央　現代における漢字使用について
難波美奈子　絵本の語彙が乳幼児の言語獲得に与え得る可能性について
東出　潔佳　現代作品での廓言葉の役割
古川　英未　誘い・勧誘に対する断りにおける配慮表現
―「ウチ・ソト・ヨソ」の観点から―
前澤　志依　話しことばと書きことばの混同
―接続詞を対象にして―
山出　裕奈　副詞「もう」を中心とした副詞どうしの語順

漢文学　寺門日出男ゼミ

狩野　綾佳　曹植の実像について―史伝との相違を中心に―
川上　真遥　伍子胥像の変遷について
工藤　成美　『夷堅志』における「鬼」について
竹内麻菜美　『子不語』の主題について
早坂美由起　日本における『墨子』評価
間宮　桜　平安文学における中国の影響について

国語教育学　牛山　恵ゼミ

甘崎　緑梨　作文指導の在り方
―生活作文コンクールの受賞作品から―
糸井　美智　「おてがみ」について
伊藤　貴彦　2010年代の国語教育のあるべき姿
遠藤　志保　学力における男女差

神保江里子　戦争を題材とした国語教材のよりよい学習指導
栗谷　春輝　国語教育における神話
—戦前の神話教育を中心に—
須藤　智香　漫画におけるジェンダー問題—中学生を対象に—
関和　　瞳　教材としての「猫の事務所」
徳井　将平　国語教育に関する小説
糠信恵理香　中学生のコミュニケーションの問題を国語教育で
牧野　翔太　読書教育と図書室の連絡
味噌　小夏　ジェンダーの視点から見た国語教科書
三宅　玲果　芥川龍之介「地獄変」について
—説話との比較を中心に—
山田　千鶴　オープンスクールにおける国語教育の現実—教科センター方式を取り入れた学習指導を中心に—

英文学科　平成25年度卒業論文題目

稲垣　孝博ゼミ

河野　　理　*Harry Potter*の魅力
—子どもたちを惹きつける世界観とストーリー—
五味　春菜　世界のシンデレラストーリー
—主人公と継母の関係性—
白石　　航　*Gulliver's Travels*の政治学的側面
田中　友実　*Gulliver's Travels*にみられる理性とユートピア
壷屋　里美　*The Lord of the Rings*における森の表現について
中村　真那　３つのフィリップ・マーロウ像
—原作者と二人の訳者の比較—
中山　　響　ジョージ・オーウェルとAnimal Farm
羽染　　南　*Pride and Prejudice*にみる恋愛観・結婚観
水口　真緒　*Peter and Wendy*における成長と年齢の解釈
柳原沙央里　ルイス・キャロルが*Alice's Adventures in Wonderland*に見るヴィクトリア朝精神
山塙　由莉　*Tom's Midnight Garden*における庭の意味
綿愛　　美　*Howl's Moving Castle*におけるジョーンズの理想の女性像

今井　　隆ゼミ

大久保伸吾　A Syntactic Analysis of Adverb Expressions in English and Japanese - The Relationship between "probably" and "tabun - darou"
岡﨑　哲也　Relation of Language and Music.
佐々木　良　Looking at Lexical Phenomena from Syntactic Perspectives
戸田竜之介　The Economy and Binding in the Minimalist Program
山本奈緒子　Individual Differences in Second Language Acquisition

大平　栄子ゼミ

河合　裕美　*Bombay*から見る異宗派間結婚
川﨑あかね　*Silas Marner*からみる作者の孤独と理想
佐久間菜摘　Peter Rabbit物語の絵と文からみる絵本の新しい読み方
鈴木　愛美　*Water*に見る寡婦とその影響
原田あゆみ　*Daisy Miller*の悲劇の真実
松沢　光起　*"Employability in the Third Era of Globalisation"*から見るグローバル人材育成の課題
松林　麻耶　『ありあまるごちそう』からみる先進国の食の問題
八橋　孝憲　*India Today*にみるダウリー事件とインドの結婚事情
山下　　郁　*Monsoon wedding*から見る親の愛情
吉原　真美　Mary Wollstonecraftから見たイギリスのジェンダー論
吉元　七海　*The wonderful Wizard of Oz*
—木こりは心を持っているのか—

窪田　憲子ゼミ

青野　　雅　ハリー・ポッターの裏側の世界
—スリザリンは悪者か—
菅　あずさ　*Oliver Twist*による19世紀イギリスの孤児問題
木村　祐子　The Man Beneath the Mask - A study of Andrew Lloyd Webber, *The Phantom of the Opera*
久保佳名美　シシリー・バーカー『花の妖精シリーズ』研究～妖精の意義～
小向　里奈　William Trevor "Rose Wept"における"victim of innocence"—ローズの涙—
志村　早織　*A Christmas Carol*における「慈愛」の意義
鈴木　杏実　ジェイン・オースティン　*Persuasion*研究—不変の愛を貫いたアンが手にしたもの—
鈴木　歩美　*Pride and Prejudice*研究—理想的な結婚の３つの条件
関口　真実　『ジェーン・エア』からみる、19世紀イギリス女性—結婚・労働—
髙橋　瑞希　Kazuo Ishiguro, *Never Let Me Go*における「自己犠牲」
山口　彩香　*David Copperfield*における主人公のアイデンティティ形成
山口　香織　"PETER PAN"における母親像—子どもの視点から考える理想と現実—
若田　部歩　『嵐が丘』における死と自由
横木　芽生　『高慢と偏見』の結婚観—欠点の克服—

奥脇奈津美ゼミ

足達　美紀　The Acquisition of Adjective＋Noun Collocation in L２ English

伊藤　美咲　言語と認識の関係性
今川　和哉　今後の小学校外国語活動の在り方
—中学校英語科との接続を踏まえて—
甲斐　匡倫　英語標準テストと語彙力の関係性
片桐　梨奈　東アジアの早期英語教育の比較から見る日本の小学校英語教育の課題とこれから
加藤　大地　言語接触がもたらす言語の変化
川口　洋祐　非言語コミュニケーションの有用性
三室　佳世　英語教師の成長　自律性を巡って
杉浦　竜也　英語音声指導における近代カナ表記システムの有用性
遠山　大輔　The identities of Asian Americans in their language use
水島　佑介　世界での英語公用語化の動き

儀部　直樹ゼミ

伊藤　智子　グリム童話における様々な時代の民間伝承と比較考察
北林　　哲　『動物農場』と国家論
—腐敗した国家から学ぶこと—
佐々木なな子　キリスト教からみる宗教と人間の関わり
清水　浩祐　Hemingway—*A Farewell to Arms*に見る二十世紀初頭—
鈴木　佳祐　アメリカ奴隷制度における黒人奴隷の生き方
園部　敬祐　ホイットマンの詩に込められた彼のメッセージ—ウォルト・ホイットマンの詩集『草の葉』を読む—
田中　千宏　『森の生活』におけるソローの思想とメッセージ
堀　　宏美　黒人霊歌を通してみる奴隷の歴史—人々にとっての音楽の存在とは—
宮﨑　壮介　南北戦争と黒人—映画グローリーに見る黒人社会—

竹島　達也ゼミ

市川　佑圭　ユダヤ移民が見た光と闇—*Conversation with My Father*と*Brighton Bearch Memoirs*における考察—
伊藤　　瞳　*Once in a Lifetime*と*Death of a Salesman*より見るアメリカの夢が持つ光と影
岩谷　早智　Thornton Wilderの戯曲における*Our Town*と*The Long Christmas Dinner*の二つの共通する普遍性と時間についての一考察
金江　　譲　デイビッド・レイブの抱くベトナム戦争観—ベトナム戦争戯曲三篇の考察を踏まえて—
鈴木　千尋　Tennessee Williamsの作品にみられるアメリカ南部の特異性に関する考察
高木　駿輔　暗黒の木曜日後のアメリカにおける夢の様相と叫び—大恐慌期を舞台とする演劇３作品からの考察—
田中　由衣　アメリカの同性愛劇から見る諸問題と社会的変容
中川　智美　フェミニズム的観点からみる*A Raisin in the Sun*
中島しおり　アメリカ文学作品を介して見る同性愛者の諸問題
中原奈津美　「暗黒時代」におけるアメリカ黒人演劇３作品の考察
星川　夏海　9.11テロ後のアメリカ社会における国民の変化と政府への批判—*Doubt, The Crucible, Stuff Happens*の３作品を通して—
水野　文香　*The Guys*研究—アメリカに送るメッセージ—

中地　　幸ゼミ

池田南津子　マイケル・ジャクソンのキング・オブ・ポップへの道
小倉　理英　*RENT*の中のAIDS問題
尾平野慎之輔　アメリカにおけるジャズの変化—誕生から商業化まで—
久代　秀俊　エドガー・アラン・ポーの作品における異人種への恐怖
小室　智也　マルコムXにおける分離主義について
五嶋　美帆　Dorothy Dandridge beyond Jezebel
佐藤紀里子　*MAUS* I, *MAUS* II に潜むもう１人のアドルフ・ヒトラー　VLADEKとARTのトラウマ
地下友梨奈　A Study of Ngugi wa Thiong'o's *The River Between*
長岡佳代子　日系人による戦後補償運動の展開—Joy Kogawaの*Obasan*が与えた影響—
南部史緒里　トニ・モリスン『ビラウド』における母性愛
保坂　　航　教育からの追放—『ハックルベリー・フィンの冒険』における教育観の探究—

西出　公之ゼミ

枝　　隆嘉　globish: その実態と可能性
高橋　莉子　センダックの三部作について
辻　　桃子　コーパスの観点からみた英会話の表現と語彙
水谷　　駿　英語前置詞 in の意味の考察
元場　大貴　日本における帰国子女の現状とこれからの課題

福島佐江子ゼミ

杉谷佳菜子　語用論的誤りに関する一考察
古屋　智佳　発話解釈と語用論的推論に関する一考察
新井　有季　言語における男女差
熊谷　沙織　ポライトネスに関する一考察：英語教育の視点から
斎藤　優貴　含意と配慮言語行動に関する一考察
高川　勇貴　ポライトネス理論に関する一考察
野口あかね　日本人英語学習者による依頼表現に関する一考察
野口　將希　依頼に関する一考察
牧野　里那　語用論的転移に関する一考察
矢吹　尚大　気遣いに関する一考察：異文化比較
古田　早希　謝罪表現の日米比較

三浦　幸子ゼミ

伊藤　真也　Considering Anxiety in Second Language Learning
大森　菜華　An Analysis of Cultural Aspects in Junior High School English Textbooks
梅宮　好記　Exploring Japanese University Students' Attitude toward Different Varieties of English
川端　元輝　Exploring Effects of Extensive Reading on Reading Fluency
阪本　　遵　Global Education in High School English

Classes - Enhancing Learners' Critical Thinking
澤田　芳美　Considering Effects of Metacognitive Strategies for Listening in Second Language Classroom
神座　想　Exploring Ways to Foster Active Listening in Junior High School English Classroom
杉浦　瑞穂　Considering Effective Ways of Teaching Phonics in Junior High School
杉山実沙妃　A Study of Japanese/English Code-Switching
塚田真奈美　A Study of Teaching English Loanwords in Elementary Education
土屋沙和子　Factors to Enhance Students' Intrinsic Motivation in High School Language Classroom
深井　優介　Applying CLIL Approaches to Junior High School Instruction
吉田　俊介　Considering Effects of Indirect Written Corrective Feedback
依田　透　Considering Internal Causal Factors of Fossilization
渡邊真祐香　Exploring Effects of Using ICT on Foreign Language Activities

鷲　直仁ゼミ

池田　旦子　The British Artist
上杉　由希　≪エッチェ・アンチルラ・ドミニ！≫～ラファエル前派の新しい受胎告知～
尾林　啓紀　The Modern Society of England　The Future George Orwell Predicted in *Nineteen Eighty - Four*
楠本　将大　芸術家ロセッティとラファエル前派
小池　翔　受胎告知から見る特徴の考察
古関　芽衣　Kenneth Grahameと19世紀ロマン主義
—*The Wind in the Willows*の考察—
小林　竜也　イギリス絵画　ターナーの人生、作品への影響
佐川　祐樹　日本とイギリスの音楽教育カリキュラムの比較
櫻山　由太　文学・文化を通して考えるイギリスと日本のユーモアの違い
杉本　杏衣　主題のない絵画から見えるもの　John Everett Millaisの≪*Autumn Leaves*≫
谷本　由季　Women in the Victorian Era
鶴見　卓哉　アダムスキーと宇宙哲学
原田貴実香　イギリス人と紅茶
藤森伊織理　ジャポニスムとモード　キモノの行方
保坂　勇美　フリーメイソンの影響力
—歴史に見るフリーメイソンとは—
松嶋　大孟　英語の世界言語としての地位とその危険性　A Global Language is Not Needed in the World
松本　尚人　モームの『サミング・アップ』について

Hamish Gilliesゼミ

稲垣　静姫　Margaret Thatcher's Policies on Education
大﨑　文恵　The Origin and Legacy of Punk
小野寺紗希　How Does the Stereotypical Image of British Cuisine Compare with Reality?
川口　泉　Singapore's Language Policy
菊池　円　Male and Female Roles in the UK and Japan
稀代　慎一　Smartphone Use in Language Learning: A Survey of Japanese University Students
小金澤伸之　The Effect of Reading Aloud in the English Class
佐野　優稀　Homosexuality in Early 20th Century - the View from E.M.Forster's Maurice
下天广　悠　Selected Issues in English Education in Japan and Possible Solutions
白井小百合　English in Japan: What Variety of English Should Japanese People Aim for?
髙井　春花　A Comparison of Two Systems: the Teaching of English Oral Communication to Young Learners in Japan and Korea
皆川　麻美　Tea for British in the Past and the Present

社会学科　平成25年度卒業論文題目

現代社会専攻

地方自治論　安達智則ゼミ

雨宮里佳子　山梨の観光に関する現状と課題
—観光資源を活かすために—
市川　千尋　トヨタによるリゾート開発に包摂されていく蒲郡市の行財政と地域社会
伊東　諒　よりよい地域をつくるスポーツ
—地域スポーツが導くまちづくり—
植田　航平　市民と行政協同のまちづくり—市民参加型まちづくりを静岡県三島市で考える—
木村　瑠里　少子化解消に向けた自治体の可能性
—徳島市を事例にして—
佐川　大地　福島県いわき市における駅前再開発事業の問題と課題
田邉　李采　待機児童解消における課題
—女性労働問題による育児政策—
津賀　梢　茨城県鹿嶋市における地震防災対策の現状と課題
津久井陽美　日光市における観光振興政策の課題と展望
長澤　絵未　南アルプス市の「個性」を育む—自治組織を活かした地域コミュニティ活性化への道—
丸山　彩歌　リニア中央新幹線開発と自治体

村上　　惇　若年層を中心とした地域づくりによる地域格差是正の可能性について

現代史　菊池信輝ゼミ

岩間　彩加　結婚の変遷と女性誌の関係の考察
大月友香理　我が国の旅行文化の変遷と総力戦がもたらした影響
親田　悠平　戦後沖縄の復帰運動における教員の役割
加々美志保　少子化のあゆみと女性の社会進出
川原　夏美　現代社会における学童保育とはなにか
—その歴史的位相—
小金　正宜　日本プロ野球におけるコミッショナーの権限
—「2004年のプロ野球再編問題」と「江川事件」におけるコミッショナーの対応—
佐々木　駿　これからの学校の在り方
—戦後学力観の変遷を辿る—
白濱　克也　三島由紀夫の思想とその社会的背景
菅原　翔平　TPP参加と今後の日本について
鈴木　成美　張作霖爆殺と治安維持法改正
谷川　太一　列島改造論は日本に何をもたらしたのか
寺田　頌平　アイドルブームの今とこれから
—多様化するアイドルの価値観とその源流—
増田　　琴　「1955年の体制」と「1960年の体制」の比較
水野　健吾　新自由主義と日本経済社会
三宅　崇仁　携帯電話の利用形態からみるフィーチャーフォンの活用と販売に向けた戦略
吉田智恵美　映画の中に見る日本の家族像
—小津作品との比較を踏まえて—

社会哲学　黒崎　剛ゼミ

浅井　　優　生殖医療—生命の誕生について、より良い医療にするために必要なこと—
市村　丈朗　和辻哲郎『風土』研究
桐原　和貴　道徳教育の今後の追及
近　　秀彦　唯一者という実存
—シュティルナーの実存主義的解釈—
佐藤　大介　日本の社会運動から見る、日本の市民社会への考察
田中　李歩　身体概念からみる医療倫理
永井　　薫　現代文明生活における仮想文明と理想追求
堀　　貴雅　プライバシーにおける概念の考察と課題について
山本光一朗　日蓮主義とは何か—危険思想化する日蓮思想—
吉田　　廉　インターネットが与える個人の意識への影響
吉村　拓未　マキャヴェリ研究
渡邊　里穂　ヘーゲル「法の哲学」
—市民社会における労働の弁証法的展開—

現代社会論　進藤　兵ゼミ

宇佐美幸代　現代日本の若者についての考察—和田秀樹「便所飯」論批判と文大生へのアンケート結果—
小林　　拓　教育の構造改革の特質と欠陥
—学校選択制の分析を踏まえて—
佐藤　理恵　多文化共生社会の推進に向けて—自治体における外国人政策の課題と今後の展望—
篠崎　和樹　日本と北欧諸国の比較から見る『新福祉国家』型財政—幸福度を高める社会構想とは何か—
下薗　　崇　人道的介入と人権意識
—コソボ空爆を事例として—
高橋　幸子　エネルギー政策と民主主義
—欧州諸国から学ぶ“決定”の在り方—
浜田　美月　福祉国家と国際競争力
—北欧福祉国家諸国をモデルに—
藤井　祐子　現代日本の非正規雇用
—貧困につながる原因とその課題及び展望—
諸星　銀河　生活保護バッシングへの批判
山田　啓介　教育公務員の比較と分類
—日本の教員のこれからを考える—

企業経営・労働とジェンダー　野畑眞理子ゼミ

金丸　美穂　ワーク・ライフ・バランスの現状と課題
—山梨県を事例として—
鴨志田詩織　企業とNPOの協働
佐藤　　州　所得格差とジェンダー
佐藤　　誠　若年層の労働問題—正規労働者を中心に—
下地奈津紀　日本におけるワーク・ライフ・バランスの研究
—日本企業の育児支援について—
庄司　裕紀　教員の労働問題
菅原　拓也　過労死・過労自殺の研究
高市　健也　東南アジアの貧困と地域社会
—フィリピンを中心に考える—
谷方　寛裕　戦後日本の労働争議

生涯学習論　畑　　潤ゼミ

石井　彩香　子どものいじめ—いじめの原因と子どもの心理—
伊藤　芳晃　スポーツが人間にもたらすもの
—スポーツを通じた人間性と文化の発達—
沖野　敬祐　Twitterの持つ多様性と同期性について
川畑　一樹　電子メディアが若者の地元志向に与える影響の先行研究整理と考察
熊瀬　功督　学びの共同体—協同学習は学校の諸問題を解決できるのか—
齋藤　勝之　障がい者と表現活動—演劇教育を中心に—
寺内聡太朗　情報化社会—情報化社会によって引き起こされる思考の変化—
飛澤　　翼　高齢者にとっての幸福の形とは
—日本とデンマークの社会福祉制度を比較して—
二階堂香織　新潟県巻町に見る原発と住民運動
—自治体が、原発を選択しないということ—
林田　聡美　大人と子ども—子どもとどう向き合うか—
山田　洋輔　東日本大震災から学ぶこれからの学校教育

憲法　宮下　鉱・横田　力ゼミ

飯島　寿満　ヘイト・スピーチとこれからの表現の自由
幾多　　遼　生活保護制度について—改正法への批判と生活保護バッシングへの疑問—
井上　萌子　障害者差別禁止法理の欧米比較と日本の動向
—ケア労働の視点から—
影山　優実　原子力発電は必要か
—コスト、損害賠償の問題から考察する—

金子　明弘　教育の機会均等を問う
小谷地恵里　少年法―子どもの権利について―
齊藤　龍馬　信教の自由と政教分離
櫻田　千絵　平和主義の日本的展開
―武力行使への関わりを中心に考察―
鈴木江里子　子どもの「教育への権利」保障をめざして
―教育の専門的自律性に基づく「教師の自由」とは―
豊崎　拓見　福島原発事故からの「人間の復興」
中川　陽貴　境界線を探る―放送メディアにおける表現の自由とプライバシー侵害―
三村実可子　現代家族法の問題点について

日本経済論　村上研一ゼミ

青木　椎磨　駿河港湾アクションプランを物流視点から検討
浦川　慎司　入間市の高齢化
―全国及び首都圏の比較から考える―
小西　祐生　JR四国・徳島地区の現状と今後の展望
―他線区との比較も交えて―
小林　由佳　富士見町の農業の課題
―新規就農支援を中心として―
坂本　哲　香取地域の観光業の課題
伴野　豪　富士山の観光資源化
―三保の松原と河口湖の比較―
西村　千輝　関ケ原町の観光展望―歴史を活かした町づくり―
方　文金　中国の中小企業融資難問題―福建省の中小企業の金融の現状分析と将来展望―
三塩　真史　佐賀市内のまちづくりの現状と課題
―街なか再生計画をもとに―
宮下　凌　富士河口湖町の教育政策の展開と展望
―教育から見た国と町の政策展開と相互関連―

社会法　山崎英壽ゼミ

秋山　直紀　日本における権利としての生活保護とその現状
小俣真成美　現代の労働問題
―過労死・過労自殺についての考察―
木下翔太郎　有期労働契約法制の課題と今後のあるべき姿
近藤　亜紀　高齢者福祉・地域包括ケアシステムの実現への展望
田中　翔大　児童福祉諸相―児童福祉問題から―
塚田　尚平　日本の労働組合の発展と課題
角田るみ菜　セクシュアル・マイノリティの存在が社会に柔軟性を与える―共生社会の実現のために―
永井　宏昌　介護保険の総合的研究
中村　早希　女性労働における諸問題
増田　純也　労働者の保護と目指すべき雇用
三井　菜央　日本の少子高齢社会における持続可能な年金制度のあり方
三船　雄平　生活保護制度の現実とこれから
森　文花　外国人労働者政策の課題
―技能実習制度の実態と考察―
矢崎　健也　教員の労働条件に関する諸問題
山田彩由未　老齢年金の政策と課題
―高齢者の生存権を保障するために―

環境・コミュニティ創造専攻

環境教育　高田　研ゼミ

大久保裕真　災害ボランティアの教育的効果
―災害教育の可能性―
木村　文香　上越市高田における雁木の研究
―積雪期における人々の移動―
高橋　祐典　森のようちえんの諸相
―森のムッレ教室の事例から―
徳永　悠樹　忍野八海の観光化の歴史と現在
平賀　優実　小中学校における校舎木造化―教育環境として児童・生徒に与える影響について―
深谷絵理花　福島県における放射線教育―その現状と可能性―
古川みな海　地域密着型Café
―カフェによる地域活性の可能性―
古屋　直己　都市と農村をつなぐクラインガルテン
―高根クラインガルテンの事例から―
穂坂　沙織　ネズミは子どもたちにどのように語られているのか―ネズミの絵本における考察から―
宮下　理恵　カンボジアにおける日本人ボランティア活動の実相―日本人ボランティアと現地の思いの交差するところ―
山口　絢　銚子における醤油産業のこれから
―野田醤油と比較して―
山本　淳晴　富士山周辺地域におけるツキノワグマと人との問題

地域社会論　田中夏子ゼミ

秋山由佳梨　地域に連携を生む地域博物館―平塚市博物館とミュージアム都留の市民参加型活動を事例として―
太田　唯雅　福島県白河市を事例とした震災復興への取り組みと課題
金塚　大　重症心身障害児・者をもつ親のセルフヘルプ・グループの意義、機能と課題―ひだまりの会（長野県立こども病院を利用する親の会）を事例に―
鈴木　幸子　復興を目指す岩手県沿岸被災地の地域再生と生活再建に向けての課題は何か―岩手県上閉伊郡大槌町と陸前高田市、被災地支援ボランティアネットワーク遠野まごころネットの取り組みを中心に―

地域経済論　千葉立也ゼミ

磯辺　真咲　キャラクターを用いた中心商店街活性化―富山県氷見市を事例に―
今井　華恵　中山間地域の観光による地域振興のあり方
―長野県木曽地域を事例に―
小川　和磨　地域内都市農村交流としてのグリーンツーリズム―静岡県御殿場市を事例として―
笠井　彩加　地域ブランドによる地域振興
―三重県伊勢茶を事例に―
齋藤　桃子　企業のメセナ活動による地域活性化
―ベネッセによる香川県直島のアート・プロジェクトを事例に―

菅生　栄太　住民活動による地域資源を活かしたまちづくり
—徳島県吉野川市美郷地区を事例に—
古川　優依　倉敷美観地区における歴史的町並みを生かしたまちづくりの取り組み

農山村再生論　林　公則ゼミ

岩川笑美香　屋久島におけるエコツーリズムの現状と課題
小河　広弥　学校給食における地産地消
菊池　和也　日本住血吸虫から見る甲府盆地における今後の「多自然川づくり」の考察
竹田　和海　ブラックバス問題における政策的手段の考察
望月　洸生　山梨県における森林環境税
—森林環境保全基金事業の現状と課題—

環境社会学　平林祐子ゼミ

荒川　智洋　福島第一原子力発電事故後の結婚に対する福島の若者の意識
伊藤　勝樹　「いじめ」による２つの自殺事件の比較から浮き彫りになる教育現場の課題と改善策の検討
大塚　　翼　電気自動車は本当にエコなのか？
—CO２排出量に関する考察—
小野　僚子　水俣病からみる報道の限界について
加賀山菜月　環境保全型農業と有機農業の推進に向けて
熊谷　武士　日本の林業における森林施業論の研究
小板　彩乃　原発事故報道による福島県産農作物への影響
松田　　華　日本におけるスマートグリッドの有用性についての考察
三澤　将武　ソーシャルメディアに潜むプロパガンダの危険性
山田　凌大　父親の育児参加における意識調査と実態
渡邊　真幸　都留市における太陽光発電の現状と導入拡大に向けて

都市環境設計論　前田昭彦ゼミ

品川　祐介　都留市循環バスの研究
澁谷　悦子　自治体における障害者の権利擁護に関する条例について
戸澤　和志　日本の貧困問題
中澤　彩美　自治体による「空き家」への取り組み
—条例・制度からみる現状と可能性—
原井　壮大　富山ライトレールに関する研究
福岡　早紀　寺山修司演劇30時間市街劇『ノック』に関する研究
吉村孝之介　1980年代以降の音楽鑑賞法の変化と音楽配信サービスに関する研究

地域環境計画　渡辺豊博ゼミ

青木　　崇　涸沼の水質環境改善についての考察
—クリーンアップひぬまネットワークと他の事例を比較して—
袁　　必架　太湖の水環境問題—太湖の水環境の現状と琵琶湖の事例を考察し、太湖の水環境の再生を考える—
奥脇　有人　自然エネルギー事業による地域振興のさらなる発展について—都留市小水力発電事業と岩手県葛巻町自然エネルギー事業を比較して—
小原　悠平　地域おこしから見る「木の駅プロジェクト」
—山梨県道志村と岐阜県恵那市を比較して—
菰田　翔子　環境を生かしたまちづくりの先進性と可能性
—愛知県田原市を事例に挙げて—
新村　　涼　里山再生実現に向けた住民主体維持管理システムの提案—三島市大場湿地帯と境川・清住緑地を比較して—
築田　　彩　食を生かしたまちづくり
—静岡県富士宮市の取り組みと今後の可能性—
土山　　茜　NPOビジネスの地域振興における今後の可能性について—三島・街中カフェを事例に—
唐　　冲　アジアに於ける循環産業発展のための日本の環境協力
日向史緒里　富士山の世界文化遺産登録後の課題と今後の方向性—世界文化遺産白川郷と比較して—
松野　亮太　伊豆市修善寺温泉における観光業の再生—箱根・草津における観光振興・管理体制の比較—
望月　　恵　清水駅前周辺商店街の活性化に関わる方向性
—地域特性を活かした商店街と比較して—

比較文化学科　平成25年度卒業論文題目

伊香　俊哉ゼミ

小田　元太　兵器開発者の思い―原爆開発者と日本の731部隊について―
木村　佳南　特攻の真実
―彼らは何を思い出撃していったのか―
儀間　愛里　住民からみた沖縄戦
佐野　亮平　15年戦争期　山梨民衆の戦争体験
椙本明日香　芸術と政治
高野　千尋　15年戦争下の『少年倶楽部』
―軍国少年の形成に及ぼした影響―
高橋　里実　戦没学徒兵の手記から見る戦時の若者の思想
高橋　涼香　戦後補償運動―「慰安婦裁判」から見る訴え―
多田　彩乃　戦争の記憶―いかに次世代に語り継ぐか
丸山智恵美　戦没者遺族の平和運動と靖国神社

内山　史子ゼミ

大谷　珠絵　シンガポールにおける教育政策の変化―シンガポール・スポーツ・スクールの事例―
菊池　有紗　東南アジア大陸部の伝統舞踊に残るヒンドゥー教
北山　祥子　インドネシアに進出する日本の食品企業
木藤絵理香　東南アジアにディズニーランドは作れるか
佐藤美果子　水利都市アンコールの利水技術―バライ建築の目的とは―
清水　美里　タイの開発と環境問題の展望
鈴木　直人　私たちは貧困をなくすことが出来るか
瀬戸　雄太　タイの上座仏教と開発僧
高橋　　司　ダッワ・カンプス
瀧音　瑞希　ベトナムにおける日本食の動向と今後について
―日本食ブームを背景に―
土屋　勇貴　ベトナムの基礎教育の普遍化に向けて
望月　悠希　シンガポールの経済成長と日本

大辻千恵子ゼミ

五十嵐麻衣　アメリカを支えるメキシコ系移民
―移民排斥を問う―
池川　里香　現代によみがえるポカホンタス神話―ディズニー映画『ポカホンタス』から見る歪曲された史実とイメージ―
大友　一真　食の安全基準を見直す―食品添加物、遺伝子組み換え食品を通じて―
関口菜生子　在日韓国・朝鮮人の揺れ動くアイデンティティ
永田　　統　アメリカにおける同性婚合法化をめぐって
―隠された歴史と現在―
中谷　保喜　日本における原子力発電推進路線の確立―1950年代、1960年代におけるアメリカ合衆国の対日政策とその受容―
宮岡　佑依　ワーク・ライフ・バランス―日本企業に与える影響と実質的効果―
吉村みどり　わたしたちの差別意識―『ちびくろサンボ』絶版から考える黒人差別―

大森　一輝ゼミ

石崎　尊悠　グローバル化と日本の英語教育
上原　朋乃　外国人への日本語教育―地域日本語教室の視点から―
小田　詩帆　世界の街並みを考える
菊池　秋津　日本と諸外国の体罰の歴史と諸相
小島　弥愛　日本軍『慰安婦』問題―証言をする被害者とそれに学ぶ日本の学生―
齋藤　弘紀　再建期南部における連邦政府におけるマイノリティ救済―解放民局を中心に考える―
佐々木ちえり　小学生と美の関係について
杉山恵里花　現代アメリカにおける教育的平等を考える
福島　千尋　高齢者の住宅問題―フランス・パリとの比較から―
藤江　　南　プロ野球の将来と現状
保坂しおり　アメリカ映画と黒人社会
本田早希子　外国人力士の日本語習得法から考えられること
―充実した日本語学習のために―
増田　智裕　アメリカのゲーテッド・コミュニティへの批判
宮野　真波　日米のファッション観について
渡辺真菜美　アメリカにおける人種の重要性低下論―黒人差別の現状を中心に考える―

岸　　清香ゼミ

伊東　春香　ミュージカル「テニスの王子様」研究
―「2.5次元」にハマる女性ファンのアイデンティティをめぐって―
白鳥　　望　地域における芸術文化体験
―サイトウ・キネン・フェスティバル松本「子どものための音楽会」を事例にして―
高木　美歩　美術による戦争表象
―現代の「戦争」と美術家たち―
筒井菜美穂　景観整備によるまちづくり
―長野県小布施町を事例に―
羽鳥　悠樹　アメリカにおけるアジア美術
―サンフランシスコアジア美術館主催「アジアの幻影」展を手掛かりに―
平田　千尋　日本人の音楽体験―ミュージックビデオが可能にする自己表現的消費―
宮崎　千紘　現代日本におけるカフェ文化―東京郊外から発信するcafé slowの理念と実践の行方―

鳥居　明雄ゼミ

江連　秀明　ディズニーが与えた変化
—中世ヨーロッパの原作との違い—
岡山　和也　表現としての広告コピー
—酒類の広告を題材として—
小出　泰規　武道空手・スポーツ空手
高橋こころ　現代の異界—Missingから見る現代の怪異—
滝野　杏奈　日本舞踊における女形
—「京鹿子娘道成寺」を例として—
坪西　俊哉　茶の湯と現代美術
—類似性と美術と日本人の意識について—
中込　瑠美　天津司舞—人形と船の中の異界—
Nils Olle Berg　河瀬直美の映像表現
水田　優馬　小泉八雲著「怪談」から考察する日本と欧米の恐怖観の差異—文化的差異を超えて—

邊　英浩ゼミ

赤松　世理　外国人労働者
阿部明日香　女性リーダー論
荒川　実喜　語り物の比較論—日韓の昔ばなしからみる民俗学—
市坪那智子　韓国映画の現在—386世代とジェンダーより—
北村　朋也　トイレ文化論—たかがトイレ、されどトイレ—
澤野　唯　中国道徳教育の変遷史
白川はる菜　グリム童話史—変容するメルヘンのかたち—
戸川　雅也　台湾人アイデンティティー—教育の本土化と多文化社会におけるアイデンティティの変容—
深澤　望　波及する韓流—官民一体による政策・マーケティングを中心に—
渡邉ゆり絵　アメリカ映画から見るアメリカ人女性の自立と生き方

福田　誠治ゼミ

青山由布子　世界遺産の光と影
大泉　佳菜　現代につながる北欧の神話
齊藤　翔吾　アニミズムの体系化と一神教社会モデルとの比較—都市型社会におけるアニミズムの展望—
斉藤真海子　デンマークにおける“障害”の捉え方
—人々が幸せに感ずるその理由は—
佐藤未佳子　北欧に見る日本のエネルギーの可能性
佐藤　遼　欧州サッカー選手育成機関の各国別比較
菅原　絵梨　英語を中心にみる言語観とコミュニケーションについて
杉浦　梨央　日本における外国人子女教育—母語教育の役割—
高橋　歩希　幕末時代から現代にかけて日本とイギリスを比較する
塚田　悠　銃がもたらす社会への相違点
辻　鈴香　旅行について
松田　静佳　日本とスウェーデンのプライバシーステートメント
三浦　聡祐　英語の受動文とスペイン語の再帰受動構文の統語的特性比較
南　のどか　欧米と日本の博物館教育
宮内　結加　日本における英語のあり方
毛利　陽香　幸福の国デンマーク
—幸福を測る指標とその実情—
和田　詩織　人を繋ぐまちづくり
—ムラと都市のあり方から考える—

分田　順子ゼミ

角田　穂高　日米地位協定からみた基地問題—「改定」をめぐる動きを中心に—
鈴木　陽子　国際代理出産子の帰属問題—日米の親子関係に関する法規の違いを背景にして—
杉田安里紗　日本への外国人看護師・介護福祉士の受け入れ—制度と現場からみる現状と課題—
竹田　玲　何が児童労働を生み出すのか—児童労働問題とアフリカのカカオ農園—
谷本彩也香　日本社会の従軍慰安婦問題への反応
—政治・メディア・市民—
松永　千明　沖縄のアメラジアン—新たに選び取られた自己表象をめぐる考察—
山崎　舞　沖縄紙と本土紙—普天間基地報道における比較—

水野　光朗ゼミ

長田あゆみ　韓国の歴史博物館からみる「韓国史」—韓国独立記念館と西大門刑務所歴史館の展示より—
長田　拓也　日本とアメリカにおける広島・長崎に対する原爆投下の認識の違い
金　珍暻　チアチア族のハングル導入の問題について
朴　賢娥　ICT教育の在り方
安本　未来　日中交流について

山本　芳美ゼミ

石井さやか　富士山と女人禁制—その成立と解放の行程—
大塚　邦明　野鍛冶—近世の人々の生活を支えた技術
川田　成美　天皇制は続いていくのか—皇位継承問題を考える—
野村　香菜　化粧に依存する人々—自己のキャラクター化に焦点をあてて—
藤井　涼花　うわさはなぜ流れるのか—その発生から消滅まで
松浦　桃子　アメリカ人とドーピング—日本と比較して
松岡　里枝　八幡神とは何か—高知県土佐市宇佐八幡宮の縁起と民間信仰—
山本　華耶　おはらい町—三重県伊勢市における観光地としての町おこし
用皆　佳南　鴨居羊子は女性を変えたのか—1960年代を中心とする下着文化論

重富　恵子ゼミ

遠藤　量成　派遣労働者問題にみる「生きづらさ」
丹伊田加奈　郡山市の地域環境における米作の重要性
福田　葉月　農家の存続と市田柿ブランド化—長野県下伊那郡高森町を事例に—
宮澤　理佳　教育に対する認識の問い直し—ケニアの教育体制を事例に—

平成25年度　研究論文提出一覧

文学専攻科

佐藤　　隆　先生
鶴田　真美　　子どもたちの学びを取り戻す
樋口美菜子　　命の学習
細川　　幸　　いじめと向き合う教育実践
山口　夏季　　教師と労働―教育現場から見出す希望―
田中　昌弥　先生
入倉こころ　　これからの小学校外国語活動
―文化を繋ぐ実践―

平成25年度　修士論文提出一覧

国文学専攻

加藤　敦子　先生
柳沼　　希　　江戸俳壇における岸本調和の研究
長瀬　由美　先生
木﨑　　綾　　『源氏物語』の歌ことば
―非伝統的なことばを中心に―

英語英米文学専攻

今井　　隆　先生
髙野　祐一　　Learhers' Acceptability of L２ Collocation and the Influence of L２ Vocabulary knowledge on L２ Collotional knowledge
鷲　　直仁　先生
西村　愛美　　William Morris His Design and Life
―View on Primitivism―
儀部　直樹　先生
平塚　俊茂　　McPherson's perspective on people in Elbow Room
吉岡　亜希　　People's Desire of Establishing Identities and Science : A Study of Mark Twain's *Pudd'nhead Wilson and Those ExtraOrdinary Twins*

社会学地域社会研究専攻

進藤　　兵　先生
水野　祐樹　　日本社会の消費空間におけるおひとりさま
―新たな個人のあり方から消費の個人化を検討する―
畑　　潤　先生
李　　美珍　　社会教育における「農」の研究
―「農的生活学校」に注目して―
横田　　力　先生
北出　雅也　　象徴天皇制の形成
―日本国憲法制定の系譜に着目して―

比較文化専攻

伊香　俊哉　先生
叶　嫣偉　　日本における外国文化受容過程の考察
―戦後ジャズ受容を中心に―
大辻千恵子　先生
岩間　祥也　　コミュニティＦＭのオルタナティブ・メディアに向けた取り組み―京都コミュニティ放送、難民ナウ！の実践からの考察―
大森　一輝　先生
宮西　隼人　　19世紀ボストンのアイルランド系と黒人―差別意識から形成されるアメリカの「国民」を問う―

臨床教育実践学専攻

筒井　潤子　先生
平山　雄大　　「わたし」の萌芽・育ちを基軸に据えた「遊び」についての一考察―子ども―大人関係の中で即興的に生まれる「遊び」の場面を手掛かりに―

講演会だより

国語国文学会講演会

穂村　弘先生

平成二十五年度　都留文科大学国語国文学会秋期講演会は、平成25年11月13日（水）に二号館の101教室で 開催されました。講演者には、歌人で、小中学校の国語教科書にも作品が掲載されている穂村弘氏を迎え、「言葉の不思議」というタイトルで講演していただきました。

会場には、学生、教員の他、一般の方々も 多くお見えになり、１時間半ほどでしたが、穂村氏の講演に聴き入った充実した時間が共有できました。

講演の内容は、以下のように、五部から構成されていました。

その１　日常の言葉と詩の言葉
その２　非効率、無意味、お金にならないもの
その３　キニキリームキロッキ、背後に隠されたもの
その４　詩が生まれる瞬間
その５　共感と驚異

「その１」と「その５」は、作品例とその作品を改悪した作品例とが提示されていて、「詩の言葉」とは、「共感と驚異」を持つ言葉であることが実感されました。

例えば、「大仏の前で並んで写真撮るわたしたちってかわいい大きさ」という短歌の、下の句を「わたしたちってとても小さい」（改悪例）にすると、意味は伝わりますが、ありきたりでおもしろみのない表現になります。

言葉の使い方次第で短歌が成立するということを、穂村氏は具体的に示してくださいました。また、「その３」の「キニキリームキロッキ」というのは、「カニクリームコロッケ」のもじりです。「カニクリームコロッケ」という言葉には、カ行の中で「キ」だけが入っていない、それはかわいそうという発想から生まれた言葉です。

言葉を愛し、言葉に敏感であること、それが人生を豊かにすることを、穂村氏は伝えたかったのだと思われます。

今回の講演の中で、ご自身の作品を紹介 されるということはなかったのですが、魅力的な短歌がたくさんありますので、いくつか紹介しましょう。

ほんとうにおれのもんかよ冷蔵庫の卵置き場に落ちる涙は

水銀灯ひとつひとつに一羽ずつ鳥が眠っている夜明け前

春一番うわさによると灯台であし毛の仔馬がうまれたらしい

冷蔵庫や街灯から、すてきな短歌が生まれています。何気ない日常生活の中にある言葉を、31文字に切り取ってみると、思いもかけない詩情が生まれてくるものです。身の回りを見回して、短歌を作ってみてはいかがでしょう。

（国文学科教授　牛山　恵）

講演する穂村弘先生

会場の様子

〈講師紹介〉

穂村　弘先生
歌人。一九六二年、北海道生まれ。神奈川県、愛知県で育つ。上智大学在学中に作歌を開始する。歌集に『シンジケート』『ドライ　ドライ　アイス』『手紙魔まみ、夏の引っ越し（ウサギ連れ）』などがある。作品が中学校、高等学校の国語教科書に収載される。短歌の他、ショートストーリー集、絵本の翻訳などで活躍。伊藤整文学賞、短歌研究賞などを受賞。

講演会だより

2013年度　英文学科・英文学会共催後期講演会　石井 光太先生
『世界の現場からでしか見えない真実とは何か』

この講演は、まず石井氏がなぜ作家をしているか、ということから始まった。パキスタンなどを訪れた際、石井氏は初めて物乞いを数多く目撃する。石井氏は彼らを恐ろしく思い、その場から逃げてしまった。しかし、逃げた後に「自分は何も分からずに怖がって逃げてしまったのでは」と思い、物乞い達の真実を知ろうとする。その後、貧困層の側から物事を捉えたくなった。

石井氏は「一般的には悪いと考えられていることが本当にそうなのか」という独自の考えを披露していた。彼が貧困地域で、少女の売春を目撃した時のことである。石井氏が少女へ、「なぜ売春をしているのか」と問いかけた際、彼女は「エイズにかからないようにするため」という奇想天外な返答をした。石井氏は少女の答えを聞いて耳を疑ったが、少女の言い分によれば、「売春は強姦とは違い、相手はしっかりと避妊してくれて、加えてこちらにお金を渡してくれる。いつか、その貯めたお金を使って、自分はより安全な国へ行ける」というのだ。初め、石井氏にはこういった考え方が理解できなかったそうだ。なぜなら、この考えは売春をしている側にしか思いつかないからであった。石井氏はこの体験から、「最良の手段は一つでない」ということや「現場における事情とマクロの事情は違うということ」を痛感した。つまり物事の真実を見るには、マクロとミクロの両方の目線が必要なのである。

石井氏は続けて「なぜ学校教育が必要か」ということにも言及していた。石井氏によれば、教育は私たちの状況を変えることができる武器であるという。貧困問題を脱するにはその国や地域自身が動くだけでは足りず、知識教養のある個人が動く必要があるそうだ。「人というものは絶望の中で生きていくことはできず、希望という光にすがりつかなくてはならない。残念ながら悲しみや苦しみを無くすことはできないが、減らすことはできる。若者の直観は100パーセント正しく、若い直観に己が信念を貫き通すことが、絶望を跳ね除ける方法である。若い内は沢山の物事に触れて、自分の価値観や考え方を磨き上げるのがいい」と述べて頂き、自らが今まで経験できたことや、これから経験することを大切にしていきたいと思った。

「世界の現場からでしか見えない真実とは何か」というテーマの講演会ということで、１方向からだけの視点では知ることのできないものがある、ということを痛感した。普段私たちが「当たり前」や、「それが当然」、「そうあるべき」と考えていることも、考え方や見方を変えればそうでない場合があり、いかに自分がそれまで一方的な考えでいたかを思い知らされた。

講演者・石井光太氏の貴重な体験と、それを基にした講演会は、全ての聴衆にとって学び多きものとなったと同時に、私たちがこれから何をなさなくてはいけないかを考える道標となったに違いない。

（英文学科１年　高柳大輝）

講演会の様子

〈講師紹介〉

石井 光太先生
1977年に東京で生まれる。マスメディアとは一線を画し、独特の視点で現実に切り込む。幼い頃から物を作る仕事をしてみたいと考えており、成人して後にパキスタンやアフガニスタンなどへ足を運ぶ。貧困層の側から物事を捉えたくなり、現地へ住み込みで取材するようになる。それは、素面だけでは現状に繋がる歴史を紐解けないと考えたからであった。
石井氏の作品としては、「物乞うブッダ」、「絶対貧困」、「蛍の森」、「遺体」などがある。

講演会だより

地域社会学会講演会

塚原俊也先生

自然学校とはどのようなところかという話、生きる力の話、体験学習法を使った教育法、冒険教育の話などを聞くことが出来た。くりこま高原自然学校では、不登校・引きこもりの支援を行っており耕英寮という住み込みで生活できる施設がある。さらに、都会の子どもが田舎の暮らしを体験するための山村留学や社会人を対象とした暮らし創造塾のような非日常を利用した活動を行っている。今回の講演会は、文大には教師を目指す学生が多いということで、不登校・引きこもりの支援活動のことを中心にお話をして頂いた。不登校を経験したたいていの子どもは、話すことが苦手で物事に対する失敗を恐れる傾向がある。そのため、子どもが耕英寮に来たら、最初にその子どもの今にどう関わるかを考えなければならないそうだ。そして、話す練習をさせること。大人たちの役割は、子どもの気持ちを聞いて寄り添い、子どものしてきたことを受け止め、子どもの主体性を伸ばすこと。子どもたちと接するときには、言葉遣いは注意しなければならない。命令口調で指示することや何も考えずに適当にものを言うことは絶対にしてはいけない。子どもに自分の考えを持たすように促し、指示や話しかけることで良い関係を築くことが出来る。不登校を経験した生徒は、前でも述べたように失敗を恐れる傾向があり、チャレンジ精神、冒険心が少ない。そのことも含めて、様々なものとの関わりを学ぶことに有効と言われている体験学習を子どもたちと行っていることがわかった。また、現行の教育でアウトプットすることが大切だと言われていることにも納得できた。情報を得て知ることだけで終わってしまうのは知識の定着が薄い。しかし、得たことを誰かに伝え、表現することは知識が身に付くだけでなく人との関わりを持つことが出来る。机上の授業で学んだことを体に覚えさせることは難しいけれど、体験型の授業なら自然と体が覚えてくれる。体験学習法は、子どもに大人の考えを強いなくても様々なものと関わりを持てるから、学ぶことの楽しさを子どもに伝えられる。概念学習法を否定するわけではないが、体験学習法を取り入れた教育方法が自然学校から広がれば日本の教育が変わると思う。

（社会学科３年　鎌田瑞菜）

講演会の様子

〈講師紹介〉

塚原俊也先生

2005年１月よりくりこま高原自然学校の職員となる。主に、冒険教育をベースとした子ども長期キャンプや自然体験活動プログラムの企画、運営を担当。その他にくりこま高原自然学校が取り組んでいる、不登校ひきこもりニートの 悩みを抱える青少年の自立支援事業「耕英寮」や当自然学校のミッションである持続可能な社会と人つくりの実践を続けている。2008年岩手宮城内陸地震で被災し２年間仮設住宅での生活も体験。2011年東日本大震災では、RQ市民災害救援センター石巻河北ボランティアセンターの代表として活動。 2012年よりくりこま高原自然学校校長を務める。

講演会だより

2013年度　司書・司書教諭コース特別講演会　鎌倉幸子先生

「未来を作る場所を作る」図書館を作ること

平成25年度司書・司書教諭資格コースの特別講演会として、財団法人シャンティ国際ボランティア協会（SVA）広報課長の鎌倉幸子氏を招き、『「未来を作る場所を作る」：図書館を作ること』をテーマとして、鎌倉氏がカンボジアそして震災後の東北にて、ゼロから「図書館」を作っていった経験をお話いただいた。司書教諭科目「学校経営と学校図書館」を履修している46名、２名の司書資格を学んでいる学生、一般・職員の方５名、そしてUstream中継によりのべ16名の方に参加いただいた。（動画アーカイブ：http://www.youtube.com/watch?v=lu1s86CHJLA, Twitterまとめ：http://togetter.com/li/621628）

この講演会は、もっとも基本的な図書館の役割とは何か？を考えるヒントとして、カンボジアなど、「図書館」がないところに図書館を作る活動をなさってきた経験を通じ、『参加者と共に「図書館の役割とはなにか」』を図書館が無いところから参加者に考えていただくことを目的にご講演いただいた。

まず、内戦で文化・教育インフラが破壊されてしまった、カンボジアでの学校図書館づくりについて語っていただいた。長年続いた内戦の中で、教師や作家が真っ先に排除され、子どもたちはもとより、大人達も教育を受けられない状況が長く続いてしまったカンボジアで、図書館を作り、提供する本を作るところから、よりよく生きるために本や教育の重要性を語っていただいた。

次に東北での活動である。東北地方太平洋側沿岸部では、津波により多くの書店・図書館が破壊され、内陸部でも強い揺れにより建物の破損や、図書館が避難所となりその機能が失われた市町村が多かった。SVAではカンボジアと同じように文化・教育インフラとしての本・書店・図書館が失われてしまったところに、「移動図書館車」（車に３千冊程度の図書を積み利用者のところまでいく図書館）サービスをはじめた。本はできるだけ現地で調達し、現地で文化の循環が進むようにした。本を「借りて」「返す」という日常を子どもたちが取り戻していく一つのきっかけとなっている。

１つの象徴的な言葉で報告を締めたい。“おかしは食べたら無くなるけど、絵本は何度でも読めるから好き”（カンボジアの女の子）「読書の意義」「図書館の意義」を考える上で忘れてはならない言葉を教えていただいた報告であった。

（情報センター　講師　日向良和報告）

講演する鎌倉幸子先生

〈講師紹介〉

鎌倉幸子先生
公益社団法人シャンティ国際ボランティア会
広報課課長　兼　岩手事務所図書館事業スーパーバイザー
1973年青森県生まれ　40歳
青森県出身。1999年３月、SVA（シャンティ国際ボランティア会）に入職。同年４月より、カンボジアへ赴任し、図書館事業を担当。2011年１月に広 報課を立ち上げる。以来、広報課長を務める。東日本大震災発生後、岩手事務所を立ち上げ、津波で被害を受けた陸前高田市、大船渡市、大槌町、山田町で「いわてを走る移動図書館プロジェクト」を実施。

講演会だより

ジェンダー研究プログラム講演会

本山央子先生

2013年12月４日、NGO法人アジア女性資料センター事務局長（AJWRC・東京都渋谷区）の本山央子さんをお招きし、講演会が開催されました。アジア女性資料センターとは、暴力のない公正で持続可能な社会を目指し、国境を越えて行動する女性たちを支えるフェミニスト団体の意を示します。現在では、女性に対する差別と暴力をなくすジェンダー視点から、差別と暴力を生み出す社会構造を変えることを目標に、“情報共有・ネットワーキング”“教育・トレーニング”“アドボガシー（政策提言）・キャンペーン”という３つの観点より幅広くジェンダーの問題に取り組まれています。当日、本山さんはこの講演会の前に、永田町でSTOP秘密保護法のデモにも参加されてきており、日々エネルギッシュに活動されている様子が伝わってきました。

本講演においては、様々な最新データや事例を基に、女性の差別と暴力に関して判りやすく説明をして下さいました。学生達にとっても貴重な学びの機会となった様子です。以下、本講演を聴いた学生の感想文の抜粋を掲載します。

（初等教育学科　平　和香子）

日本の男女不平等度は「世界136ヶ国中105位」という現状を知り、非常に衝撃を受けました。今まで、恥ずかしながら女性の差別や暴力について特に意識したことがなく、そのためか私自身女性でありながら、“生まれながらに女性というだけで不平等”という考えを持ったこともありません。しかし、今回この講演を聴き、他の国に比べ国会議員の女性が占める人数が圧倒的に少ないことや、家事や育児をするのはまだまだ女性が主などの指摘を受け、そう考えてみると日本の社会システムは不平等なことが多いと気が付きました。例えば、男性が育児休業を取得することは、女性に比べて極めて困難な状況はなかなか改善されていません。この背景には、“男は仕事、女は家庭”というステレオタイプ的な物の見方が存在するからだと思います。こうした日本の状況は、世界的にみても異常だそうです。しかしこの状況を認識出来ていなかったという事は、生まれ育った環境による慣れというのは怖いものだと改めて感じました。

また、この講演会で日本には変えなければならない制度がまだ山のようにあることも知りました。性暴力に対する法律では、100年前に男性視点でつくられたものが今も使われているそうです。時代や環境が変わっていくのに、昔の法律で今を裁くというのはあまりにもおかしいと思います。その上、性的暴行の対象の多くは女性であるのに、その女性の視点は一切含まれていません。また、女は男に養われるものという古い時代の考え方が未だに残っていることも私は納得がいきません。そんな風潮が残っているから女性はいつまでたっても働きにくく、収入の差が出たり、DVに耐えなければいけない環境が生み出されているのだと思います。

（初等教育学科２年　神谷由佳子）

講演会の様子

〈講師紹介〉

本山央子先生

1968年生まれ。東京外国語大学インド・パーキスターン語学科卒業後、財団法 人ユネスコ・アジア文化センターでアジアの出版・教育事業、国際環境NGO、FOE-JAPANで開発金融と環境政策提言を担当。2006年から現職。AJWRCの情報紙『女たちの21世紀』の編集をはじめとしてセンターの活動を主導。この間、立教大学、神戸大学の大学院でも国際 政治や国際協力を研究。共著に『開発支援と環境ガイドライン』（2002）など。

文大だより

地域で活躍する学生ボランティア

山梨県内で２月14日（金）午前３時ごろから15日（土）午前10時ごろにかけて降り続けた雪は観測史上最大となりました。甲府地方気象台の発表によると、最大積雪量は甲府114センチ、河口湖143センチを記録しました。都留市でも約130センチくらいの積雪はあったと思われます。そんな中、都留文科大学生がボランティアとして地域で活躍しました。大学には「学生さんが雪かきを手伝いたいと集まってくれているが、道具が足りない。どうしたものか。」といった問い合わせもありました。また、都留市まちづくり交流センターへの避難者に対し、社会学科・比較文化学科の学生がアパートの風呂を提供し、大変よろこばれました。２月18日（火）には教員有志・学生有志・職員が徒歩で集合し、一丸となって学内の雪かきをしました。都留市では災害ボランティアセンターを２月20日（木）午前９時より立ち上げましたが、高まる学生ボランティアの声に応え、２月22日（土）には学生ホールに「都留市災害ボランティアセンターサテライトオフィス」が設置されました。大学には文大生への感謝の声が多数寄せられています。

学内雪かきの様子

奨学金（給付型）・奨励金創設のお知らせ

奨学金（給付型）・奨励金を創設し、平成26年度から実施します。

１．成績優秀者奨学金

（１）新入生スタートアップ奨学金（各学科募集定員による入試成績上位者）　70人　10万円／人

※平成25年10月～26年３月実施の入学試験新入生から対象とします。

（２）成績優秀者奨学金　（学内成績上位者）

①　成績最優秀者　15人（２年～４年・各学科１人）50万円／人

②　成績優秀者　30人（２年～４年・各学科２人）30万円／人

２．グローバル教育奨学金

（１）交換留学（１年間）　30人程度　50万円／人

カリフォルニア大学、セント・ノーバート大学、ラトガーズ大学、リジャイナ大学、湖南師範大学、韓国外国語大学校

（２）協定校留学（５か月）15人程度　30万円／人

セント・ノーバート大学

（３）認定留学（１年間）　10人程度　50万円／人

都留文科大学が留学先として認定した大学

３．遊学奨励金

海外遊学（１か月以上６か月未満）　20人程度　50万円以内／人

※遊学奨励金は、主体性、積極性、語学力、コミュニケーション能力、異文化理解等を身に着けて様々な分野で活躍できる人材を育成するため、国外で一定期間の活動を行う学生に交付します。

※遊学とは都留文科大学ホームページ内「学長ブログ」をご参考ください。

○学長ブログより抜粋

ホームページに掲載したお知らせには、遊学奨励金は「主体性、積極性、語学力、コミュニケーション能力、異文化理解等を身に着けて様々な分野で活躍できる人材を育成するため、国外で一定期間の活動を行う学生に交付」とある。

言い換えれば、これまでの学業成績や留学に必要な語学水準にかかわらず、近未来に向けて自分で主体的・積極的に課題を定め、異なる文化や価値観のなかで真の実力を身に着け、様々な分野で活躍できる人材を育成したい、そのため奨励金である。

文大だより

卒業演奏会を終えて

私たち音楽専攻は、１月25日に卒業演奏会を迎えました。卒業演奏会を迎えるにあたってたくさんの方々に支えられ、うぐいすホールという素晴らしい舞台で演奏ができたこと、そして無事に終えられたことをとても感謝しています。

私は、この都留文科大学に芸術体育系推薦という形で入学し、４年間過ごしてきました。音楽専攻として入学したのは６人。入学当初は正直何も分からない状態で、友達をつくる、都留の街に慣れる、などのことで精一杯だったように思います。高校から始めた吹奏楽部にも入部し、授業、専攻、部活と目の回るような毎日を過ごしました。なかなかピアノの練習時間がとれない為、部活とピアノの両立が辛い、と思うことも多々ありました。

１年のときは、何もかも先輩に頼りきっていた私が責任者になり、２年のときから様々なことをまとめる機会が増えてきて、自分自身成長できることをたくさん経験できたと思います。３年からは幹部学年ということで、学年全体でコンサートの運営を引っ張っていきました。たくさんの失敗をしながらも、専攻生で話し合いを重ね、先生方や先輩方のアドバイスをいただきながら一つひとつ越えていくことができました。

４年になり、一週間のほとんどをピアノに費やすことが増え、もっと音楽を深めたい、という気持ちが大きくなっていきました。先生方のおっしゃる一言ひとこと、今まではそこまで深く考えていなかったことも、どんなに私たちを思って言ってくれていたことなのかを考えられるようになり、しっかり受け止めようとするようになりました。今となっては、１年のときからもっとレッスンのときに先生がおっしゃることを理解できる余裕をもっていけばよかったな、と少し後悔している部分もあります。

卒業演奏会が近づくにつれ、４年生のモチベーションが上がっていく中、この仲間とコンサートを作り上げるのもこれで最後なのだな、と思うととても寂しかったです。ホール練習のときも、それぞれの仕事と演奏でもちろん忙しくしていたのですが、私はそれがとても幸せに感じました。私たちが都留文科大学で学んできたことの集大成を披露できる場があること、そのときが近づいていること。それは、私たちが今までこの専攻で切磋琢磨してくることができたことの証であると感じたからです。

卒業演奏会は大成功に終わりました。みなそれぞれに考えることはあったでしょうが、15人全員で迎えることができて私は本当に幸せでした。受験から一緒の６人、２年次から専攻に来た人、編入という形で来た人、ボランティアによる休学から戻ってきた人、一人でも欠けていたら、この日は迎えることはできませんでした。そして、熱心にご指導いただいた先生方、家族、友人、後輩の皆さんにも、心より感謝申し上げます。

都留での４年間は、私にとってかけがえのないものとなりました。音楽を通して様々なことを学ぶことができ、音楽専攻の一員でよかったと心から思います。本当にありがとうございました。

初等教育学科　音楽専攻４年　石塚　沙綾

卒業演奏会を終えて うぐいすホールにて

文大だより

『卒業制作展を終えて』

我々図工・美術専攻４年生の14名は、本年度１年間それぞれの課題を追求・研究してきました。そして制作活動の集大成として、平成25年度卒業制作展を２月２日（日）から６日（木）までの５日間、本学コミュニケーションホール・アートシアターで開催しました。

図工・美術専攻４年生は、卒業論文の執筆と卒業制作という二足のわらじを履かなければなりません。その為、我々は早朝から夜８時まで、パソコンと作品の前を何度も行き来しながら過ごしました。特に、立体造形ゼミで粘土を使って制作していた者は、形づくる作業以外にも焼成作業などの共同作業も多く、先生方と綿密な打ち合わせも必要で、スケジュール管理がとても重要でした。

また、私は授業の中では扱わなかった“革”という新たな素材で制作に挑戦した為、新たな技術の習得が必要でした。以前から自分自身で鞄や財布を作りたいと思っていた私は、卒業制作に向けてこれまで扱ってこなかった素材を選ぶべきか悩んでいました。しかし、やるからには自分の“つくりたいもの”にこだわろうと決心し、制作を進めていきました。細かい技術は独学であった為、当初は失敗ばかりで何度も試作品を作っては先生方からアドバイスを受けながら改良を重ねました。自分の思い描く作品、自分のつくりたい作品をつくることは容易なことではありません。しかし、こだわり続けた先には必ず自分にしか出せない良さや、手仕事の味が出てきます。忙しい毎日の中で、時には心が折れそうになったこともありましたが、様々な課題を乗り越えて最終的には納得のいく作品に仕上がりました。

４年生全員、本格的な展示作業も初めてであったため苦戦しました。展示は作品を並べれば終わりではなく、展示台の色、形、高さ、照明の角度など、鑑賞者を意識した展示をしなければなりません。乏しい経験しかない私たちにとって、理論や知識、経験を基にアドバイスをくださる先生方は本当に心強く、勉強になりました。作品を発信していくためには、展示やプレゼンテーションの知識や経験が重要であると改めて感じました。

このように卒業論文の執筆と卒業制作を並行して行うなかで、私たちは多くのことを学びました。それは社会に出るうえで大きな財産となり、自信にもなりました。楽しいことも苦しいこともあった１年間でしたが、４年生全員が同じ気持ちで互いに支え合って困難に立ち向かい、卒業制作展を迎えられたことが何よりの収穫であったと思います。

「ものづくりがしたい」という一心で、図工・美術専攻を希望してから卒業制作展までは、あっという間の３年間でしたが、私たちにとって先生方や仲間と共に試行錯誤をした日々は一生忘れることはないと思います。素晴らしい経験を与えてくれた図工・美術専攻の仲間やお世話になった先生方、ご来場頂いた皆様や開催に至るまで支えて頂いた多くの方々に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

図工・美術専攻立体ゼミ　早坂駿吾

卒業制作展会場での記念写真（図工・美術専攻４年生と先生方）

文大だより

キャリア支援講演会
「自分を育てる魔法のコトバ～プロに学ぶ、仕事と生き方～」

１月10日（金）16：30から２号館101教室にてNHK制作局・甲府放送局主催の『仕事ハッケン伝in都留文科大学自分を育てる魔法のコトバ～プロに学ぶ、仕事と生き方～』と題したキャリア支援講演会が開催されました。

ゲストは、仕事ハッケン伝ＭＣ　中山秀征さん・同番組プロデューサー　河瀬大作さん・NHK甲府放送局アナウンサー　早川美奈さん、会場は約200名の学生で埋め尽くされました。

冒頭、仕事ハッケン伝のVTR中で発せられた「社会人は努力したから偉いなんて誰も言わないよ。」との言葉に参加学生の表情が締りました。そのVTR後、トークショー形式の講演会が開始されました。

参加学生からは、「頭で考えすぎず、まず動き出してみることが大事だと気付かされました。」「就職活動中の今だけではなく、これから長い人生を生きていく中で、大切にしたいお言葉をもらえた。」「人は「言葉」によって、いくらでも影響を受けるし、頑張れるし、変わるのだ、と実感した。」「今だからできることを一生懸命がんばっていきたいと思った。」「私は何にでもなれると思った。」等の声が聞かれました。

講演会の様子

講演会の様子

文大名画座『100,000 年後の安全』

恒例となりました、文大名画座が１月22日（水）18時30分から２号館101教室において開催されました。今回は、誰にも保障できない10万年後の安全、放射性廃棄物の埋蔵をめぐって未来の地球の安全を問いかけるドキュメンタリー映画「100,000年後の安全」を上映しました。会場には小学生から年配のかたがたまで約50名が集いました。

本学社会学科、平林祐子教授の「日本では近くにいると20秒で死んでしまう高レベル放射性廃棄物が処分されようとしている。フィンランドでは地下に埋められることが決まった。この廃棄物が埋められる地下と、地上の美しさとのギャップがシュールである。」といった解説の後、本編が上映されました。

参加者からは、「自分たちが簡単にスィッチ１つで使っているものの重さを再認識することが出来ました。処理できないものを増やすのではなく、なくすことが必要だととても強く感じています。私たちの地球のために、自分のできることから少しずつしていきたい。」、「原発はもういらないと強く感じました。未来の人々が安全な生活を送ることができるように祈るばかりです。」、「今まで見たどんなホラー映画よりも怖いと感じました。こんなにも途方もないものだとは思ってもいませんでした。」などの感想が寄せられました。

名画座の様子

文大だより

地域貢献活動「つるの宝かるた」に参加して

今年度、図工・美術教室では、本学が推進する地域貢献活動として「つるの宝かるた」づくりに参加した。本企画にチャレンジしたきっかけは、昨年度本学で開催した当教室の卒業制作展で学生たちが発表した平面や立体作品が、一般社団法人都留青年会議所の方々の目に留まったことからだった。

今回の依頼は、当会議所が今年度のまちづくり事業の一環として「つるの宝かるた」の作成を企画し、市内の小学校２年生から６年生の児童約1400名を対象に都留市の史跡や名所、伝統行事、地域に由来の人物等を題材としたかるたの読み札を募集した。この中から選定された読み札45枚をもとに本学の図工・美術教室の学生たちが絵札に起こすというものであった。子どもたちが詠んだ“つるの宝”には、お八朔祭り、リニアモーターカー、そうりゅう峡、エコハウス、法能神楽、長安寺の茶壺。更につるの宝として本学を選んだものや本学出身のジャーナリスト、故山本美香さんを詠んだ句などが含まれていた。

この活動に参加した私たち自身も改めて都留市民が誇りとする歴史や文化に触れる貴重な機会となった。

文大ロゴ入りTシャツを着ての記念撮影

小学校教師を目指して日々制作活動を行う学生たちが、子どもたちの読み札から情景を思い浮かべながら無心に絵筆を走らせていた姿が印象的だった。

美術を通した地域貢献の新たな提案として、本企画参加は意義深いものであった。

初等教育学科 図工・美術教室　教授　竹下　勝雄

フィールド・ミュージアム通信

キャンパスでリスとの出会いを楽しむ

美術棟横の林に設置されたリスの餌台

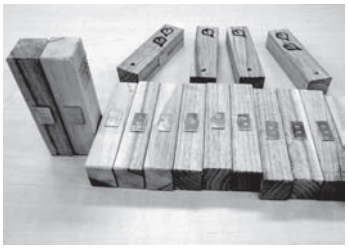
地域交流研究センターのフィールド･ミュージアム部門（以下、部門と記します）では、「自然と人の交流」をテーマに、学生・職員・教員・市民とともに身近な自然や人びとの営みからじかに学ぶ実践を重ねてきました。地域の自然との共生という大きな課題一つをとってみても、まずは身近な自然に直接触れ、親しむことによる実感を伴った理解や、学び合いの輪を広げる多彩な交流が欠かせないと考えたからです。

そこで部門では、キャンパスをフィールド･ミュージアムの中枢に位置づけ、「自然に親しむ場」とする事業にも積極的に取り組んできました。現在では、学生が主体となってビオトープの維持管理を担い、本学の環境ESDプログラムと連携した自然観察会も市民の参加のもとで貴重な交流と学びの場が生まれています。

本学のフィールド･ミュージアムには、都留市におけるムササビ観察に始まる約30年の実践があります。その素地を活かした試みも始まりました。その一つが、「キャンパスにリスを呼ぶ会」の取り組みです。もともとキャンパスの周辺には野生のリスが生息しています。リスの暮らしに干渉することのないような観察の工夫を考えながら出会いを一緒に楽しもう、という会です。生き生きとした野生のリスとの直接の出会いは、地域の自然との付き合い方を考える契機ともなるでしょう。

自然にかこまれた本学の特徴を活かしたこのような取り組みを、新たな交流や学び合う場へと大切に育んでいきたいと考えています。

（地域交流研究センター　フィールド･ミュージアム部門）


クルミ材などで製作した会員証も好評です

（注）:「キャンパスにリスを呼ぶ会」にはどなたでも参加できます。現在、会員は63名（2014年１月22日現在）です。活動に共感していただけるかたは、地域交流研究センター事務局までご連絡ください。イベントや関連情報をお知らせいたします。

編集後記

情報センター講師　日向良和

平成25年度最後の学報の編集後記である。年度最後の学報には退職される教員からの言葉、卒業論文一覧など、大学におけるそれぞれのまとめの言葉が掲載されている。特に卒業論文はおそらく初めてのまとまった文字数による論述で、大学における４年間の講義などで修得した知識・スキルを総合的に活用しないと作成することができない。25年度より１年生向けの学習・情報スキルを学ぶための「アカデミック・スキルズ」科目を担当したが、１年生のここから、４年生の卒業論文まで一貫した教育が大学ではおこなわれており、それが「学士」の学位に相当するのである。卒業論文においてやり残したこと、もっと研究したいこと、実践で試してみたいことを、ぜひこれからの仕事や生活で活かしていただき、少しでもその成果を前に進めていただければ、学校や社会の現場が良くなっていくように思われる。

これから社会にでる学生達、大学では社会の厳しさが何度となく話されたことだろう。しかし社会には自分と価値観を共有する仲間や、仕事や生活におけるチャンス、家庭から本格的に離れる自由など、楽しみもたくさんある。ぜひそれぞれの社会で楽しんでいただきたい。

学童保育でのよみ聞かせ

本　ぶんだい堂

生命倫理の教科書
何が問題なのか

黒崎　剛・野村俊明／編著
2014年1月
ミネルヴァ書房　2,800円＋税
◇くろさき　つよし　社会学科准教授

レオニー・ギルモア
イサム・ノグチの母の生涯

エドワード・マークス／著　中地　幸 他／訳
2014年1月
彩流社　5,000円＋税
◇なかち　さち　英文学科教授

都留文科大学広報委員会　鳥原正敏（委員長）・日向良和（副委員長）・坂田有紀子・佐藤明浩・奥脇奈津美・田中里美・大森一輝・福田誠治（担当副学長）
谷内治彦（経営企画室）・程原誠二（情報センター）・鬢櫛美咲（総務企画担当）・近藤秀明（総務企画担当）